

しも きた かた しも ごう  
下 北 方 下 郷 第 4 遺 跡

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

宮崎市教育委員会

しも きた かた しも ごう  
下 北 方 下 郷 第 4 遺 跡

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

宮 崎 市 教 育 委 員 会

## 序

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内各地では様々な開発事業が行われていますが、それに伴い遺跡の発掘も行われ、先人達の生活を物語る貴重な出土品が発見されています。

今回調査された下郷第4遺跡は、宮崎市北部の台地上にあります。現在は閑静な住宅地ですが、弥生時代は環濠集落として知られる下郷遺跡が、古墳時代は地下式横穴5号から多くの武具や装飾品が出土した下北方古墳群が分布し、古代は古代瓦が発見され、中世は宮崎城が近くにあり、近世は延岡藩の奉行所や武家屋敷が置かれるなど、時代を超えて一帯の中核であり続けた地域です。このほか、神武天皇が居を構えたとされる皇宫神社や、平家物語に名高い藤原景清に因んだ景清廟など、神話や伝承に因んだ名所、旧跡も数多く分布します。

出土した遺物は非常に残存状況がよく、特に古墳時代の遺物は、遠隔地から持ち込まれたと考えられる土器が多く含まれていました。地域の代表として積極的に先進地との交流を行う姿は、宮崎県のフロントランナーを掲げる宮崎市としても参考になります。わたしたちは、そうした先人達を偲びながら、彼等の生活の痕跡を大切に受け継ぎ、未来への糧としていかねばなりません。

調査は冬に行いました。このたび報告書を刊行することができたのも、霜柱に悩まされながら調査に携わられた作業員の方々や、作業に理解をくださいました周辺にお住まいの方々のお蔭です。末尾ではございますが、この場を借りまして、心よりお礼申し上げます。

平成21年3月

宮崎市教育委員会  
教育長 田 原 健 二



## 例　言

- 本書は、集合住宅建設に伴う、宮崎県宮崎市下北方町下郷に所在する下北方遺跡群の域内に分布する下郷第4遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成18年12月4日～平成19年2月9日までの期間実施した。
- 整理作業は、宮崎市教育委員会が平成20年5月25日～平成21年3月13日までの期間実施した。

### 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

(平成18年度：発掘調査)

(平成20年度：整理作業)

文化振興課	課長	野田 清孝	文化財課	課長	小掠 勝
調査総括	主幹兼文化財係長	山田 典嗣	整理総括	主幹兼文化財係長	山田 典嗣
調査事務	主任主事	鳥枝 誠	整理事務	主査	松崎 留美
調査員	主任技師	金丸 武司	整理担当	主任技師	金丸 武司
補助員	技師補	河野 雅人		嘱託	稻元久美子
	嘱託	茨木 浩一			床境 美紀
				作業員	

- 掲載した図面のうち、現場における実測は金丸・河野が、遺物の実測は稻元・庄境・小川・甲斐・福丸が分担して行った。
- 現場及び遺物の写真撮影は金丸が行った。
- 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。  
SA：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SP：ビット
- 本書で使用する北は、全て磁北である。
- 本書の執筆・編集は金丸が行った。
- 出土遺物及び掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。



# 目 次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の概要	5
第3節 層序	5
第4節 検出遺構及び出土遺物	9
1. 古墳時代の成果	9
①堅穴建物	9
②包含層中の遺物	11
2. 古代の成果	14
①堅穴建物	14
②掘立柱建物	27
③溝	27
④包含層出土土器	28
3. 中・近世の成果	29
①土坑	29
②溝	29
③包含層出土遺物	30
第Ⅲ章 調査の成果	31
挿図目次	
第1図 宮崎平野地形図	2
第2図 下郷第4遺跡周辺地形図	3
第3図 下郷第4遺跡位置図	3
第4図 土層柱状模式図	6
第5図 遺構分布図	7、8
第6図 古墳時代遺構分布図	9
第7図 SA 1 及びSA 1内出土実測図	11
第8図 SA 1内出土遺物実測図	12

第9図 SA 2及びSA 2内出土遺物、古墳時代出土遺物実測図	13
第10図 古代遺構分布図	14
第11図 SA 3、4及びSA 3、4内出土遺物実測図	15
第12図 SA 3、4内出土遺物実測図	16
第13図 SA 5、6及びSA 5、6内出土遺物実測図	19
第14図 SA 5、6内出土遺物実測図	20
第15図 SA 7~9及びSA 7~9内出土遺物実測図 (SE-01、02、ピット内)	21
第16図 SA10、11及びSA10内出土遺物実測図	22
第17図 SA12、13、SB 2及びSA12、13内出土遺物実測図	23
第18図 SB 1及びSB 1内出土遺物実測図	24
第19図 SE 1及びSE 1内出土遺物実測図	25
第20図 古代出土遺物実測図	28
第21図 中・近世遺構分布図	29
第22図 SC 1及び中・近世出土遺物実測図	30
第23図 宮崎市内出土のコップ形須恵器	32

#### 表目次

表1 出土土器観察表(1)	33
表2 出土土器観察表(2)	34
表3 出土土器観察表(3)	35
表4 出土土器観察表(4)	36
表5 出土土器観察表(5)	37
表6 出土土器観察表(6)	38

#### 写真図版

調査現場写真	39
出土遺物写真	44

(表紙) 出土遺物 (コップ形須恵器と古代瓦)

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 遺跡の立地

下郷第4遺跡は、宮崎市下北方町下郷に所在する。遺跡の立地する下北方町は、宮崎平野を流れる大淀川が南へ大きく湾曲する部分の左岸にある。この区域は、垂水台地と呼ばれる洪積台地を基点に、西に竹篠・柏田、東に宮崎城・平和台・下北方と、二本の丘陵が南下しながら分岐する。丘陵の基盤層は宮崎層群であり、発達した開析谷による細尾根が細かく枝分かれしながら展開するが、丘陵の基点である垂水台地と南端の下北方台地は比較的平坦であり、シラスやアカホヤなどの火山灰が順次堆積する。今回の調査区は、下北方台地でも中央部やや北寄りの下郷地区にあたる。

## 第2節 歴史的環境

下北方台地及びその周辺は、遺跡が多数分布する地域である。

旧石器時代の遺跡は、下北方地区では、東端の独立丘陵上にある下郷遺跡のみであるが、北部の垂水台地には、ナイフ形石器や剥片尖頭器等の出土した垂水第1遺跡・第2遺跡、金剛寺原第1・第2遺跡、阿部ノ木遺跡が分布し、船野台地や長蘭原台地から連なる遺跡密集地を形成する。なお、垂水台地から下郷遺跡に至る遺跡群は、宮崎県における旧石器時代編年（いわゆる十段階編年）ではV～VII期に集約されるが、その前後の石器群、とりわけ船野台地や長蘭原台地に多いVIII・IX期の細石刃文化の遺跡は皆無であり、際立った特徴となっている。

縄文時代の下北方地区も下郷遺跡に限られ、早期中葉～後葉、中、後期の遺物が僅かに出土するのみである。先に述べた垂水台地では、垂水第1・第2遺跡や伊屋ヶ谷遺跡から早期の遺物が少量出土する。なお、大淀川沿いに分布する柏田貝塚や、対岸の洪積台地に立地する跡江貝塚からは、早期後葉を主体とする貝塚が形成され、九州最古段階の貝塚と位置づけられる。また、縄文時代の遺跡は、下郷遺跡から出土した数点を除くと、全て早期に限られることも特徴であり、前期以降の様相は極めて不明瞭である。

弥生時代は、下北方台地東側の低地に立地する垣下遺跡より、弥生時代前期の土器と共に溝状遺構や木製農具が検出され、低湿地を利用した初期水田農耕が明らかとなつた一方、漁撈具である筌の発見は、多彩な生業形態を窺わせた。垣下遺跡に隣接する独立丘陵には、二重の溝を持つ弥生中期の集落である下郷遺跡が存在しており、隣接する宮崎大学茶園遺跡や大宮中学校校庭遺跡と共に、台地の環濠集落と開析谷の水出という土地利用を垣間見ることができる。ほぼ同時期、跡江台地でも石ノ迫第2遺跡から弥生時代中期の集落が確認される。下北方台地と跡江台地に出現した二つの集落は、古墳群出現の前段階として注目される。

古墳時代の下北方台地は、数多くの古墳が作られ、下北方古墳群のうち塚原支群と呼ばれる一群を形成する。高塚古墳の周囲には地下式横穴墓も多数分布しており、7号墳に伴う地下式横穴第5号からは、金銅製装身具をはじめ短甲、兜、馬具、鏡、剣、鎌等の鉄製品が副葬されており、下北方古墳群の代表的存在である。垂水台地を基点とする二本の丘陵上には、上北方



第1図 宮崎平野地形図 ( $S = 1/50,000$ )



- 1 下郷第4遺跡
- 2 大宮中学校校庭遺跡
- 3 下郷遺跡
- 4 茶園原遺跡
- 5 堀下遺跡
- 6 船塚古墳
- 7 垂水第1遺跡
- 8 金剛寺原第1遺跡
- 9 金剛寺原第2遺跡
- 10 小原山第1遺跡
- 11 小原山第2遺跡
- 12 阿部ノ木遺跡
- 13 伊屋ヶ谷遺跡
- 14 宮崎城跡
- 15 上北方横穴墓群
- 16 柏田貝塚
- 17 跡江貝塚
- 18 石ノ迫第2遺跡
- 19 生目古墳群

第2図 下郷第4遺跡周辺地形図  
(S=1/50,000)



- |          |          |           |              |
|----------|----------|-----------|--------------|
| 1 下郷第4遺跡 | 5 下北方6号墳 | 9 下北方11号墳 | 13 堀下遺跡      |
| 2 下北方5号墳 | 6 下北方8号墳 | 10 下北方2号墳 | 14 大宮中学校校庭遺跡 |
| 3 下北方3号墳 | 7 下北方7号墳 | 11 下郷遺跡   | 15 景清湖       |
| 4 下北方1号墳 | 8 下北方9号墳 | 12 茶園原遺跡  | 16 皇宮神社      |

第3図 下郷第4遺跡位置図

横穴群や池内横穴群、瓜生野横穴群などの横穴群も多数分布する。一方、大淀川の対岸にある跡江地区の台地上にも、生日古墳群が立地するほか、背後には浮田横穴墓群が控える。時期的には生日古墳群のほうがやや先行することから、生日から下北方へと政治権力の推移が窺えると共に、両古墳群が宮崎平野における古墳時代の中核的存在だったことを示している。

古代の遺跡は、宮崎平野では微高地や丘陵上より集落が多く確認されているが、下北方台地では下北方5号墳の周溝内や景清廟周辺において古代瓦が発見されるなど、他では見られない特徴を持つ。なお台地西方には、帝釈寺という古代寺院が存在したとの言い伝えも残されており、関連性が注目される。11世紀には、下北方地区を含む一帯は莊園「宮崎庄」として、宇佐八幡宮に寄進されたとの記述が文献に残される。

中世における下北方台地の様相はきわめて不明瞭であるが、下北方台地と乗水台地の中間に築かれた宮崎城は、曲輪ごとの独立性が強い群郭式山城として、南北朝時代から戦国時代にかけ、伊東氏と島津氏の攻防や内乱の舞台となってきた。1572年に伊東氏が豊後へ逃れると、宮崎城は島津氏の重臣上井覺兼が入城した。当時は曲輪ごとに家臣の屋敷が立ち並んでいたと伝えられる。また覺兼が遺した『上井覺兼日記』は、戦国武将の日常が生き生きと描かれた文献として知られている。

近世に至り宮崎城は廃城となるが、豊臣秀吉の国替えから幕末に至るまで、住吉以南大淀川以北はその大部分が延岡藩の飛び地となり、下北方地区は今の大宮中学校に置かれた宮崎陣屋（代官所）に勤める武士の屋敷地として、地域の中心的役割を担ってきた。

このほか、歴史的環境を説明する上で重要なと思われる名所が2箇所ある。下北方地区の歴史に関わると思われるため、ここで紹介したい。

一つは皇宫神社である。台地南端に所在するこの神社は、宮崎神宮の前身であり、東征以前の神武天皇の住居と伝えられる。

もう一つは景清廟である。藤原景清を奉った宗廟であるが、先に紹介したように近隣から古代瓦が出土するなど、むしろ古代において特殊な性格を持っていたと考えられる。

これらがいつ頃から存在するのか、現在は不明である。しかし、二つの名所は下北方台地の南端と北端に位置し、一直線に伸びる小道で繋がっている。こうした位置関係も併せて、注目に値しよう。

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査に至る経緯

平成18年8月25日、[ ] 株式会社より、共同住宅新築に伴う文化財の所在の有無について照会があった。開発策定区域は県指定史跡「下北方古墳群」の周辺に立地することから、対象区域にも遺跡の存在する可能性があり、試掘調査が必要であると回答。これを受け、9月12・13日に試掘調査を行った結果、予定地のほぼ全面にわたり住居跡や土器等が検出され、埋蔵文化財の存在を確認した。その結果を基に土地所有者と宮崎市文化振興課（当時）の間で協議し、施工上破壊をやむを得ない建物部分について、本調査を行う旨を伝えた。

調査は平成18年12月4日から平成19年2月2日まで行われた。調査面積は394m<sup>2</sup>である。

### 第2節 調査の概要

調査は、建物部分及びその外側1mを範囲とし、重機にて耕作土を除去したところ、アカホヤ火山灰の検出面で無数の掘立柱建物と多くの竪穴建物を確認した。また、調査区西側は、古代・中世の遺物包含層を確認したため、重機による掘削を中止し人力にて掘り下げた。掘削を行いながら遺構検出も試みたが、困難であったため、遺構検出は本来のアカホヤ火山灰上面で行うこととした。

検出された遺構は、竪穴建物、ピット群、溝、土坑である。竪穴建物は、重複が激しかったために上層観察に時間がかかったが、古墳時代2軒、古代11軒を確認した。古墳時代の竪穴建物からは、一括廃棄と思われる、良好な残存状態の土器が多く出土した。古代の竪穴建物の多くはカマドを伴うが、通常設置される北壁のみならず、南壁や西壁に設けるものも認められた。ピット群は調査区東側を中心に300基以上検出され、その配置から掘立柱建物を2棟確認した。径20cm以内の小ぶりの柱穴が多い中、柱痕を伴う、径40cm以上の柱穴の並びも2列にわたって確認した。これらの柱穴は、古代もしくは中・近世の所産と考えられる。溝は古代と近世を1条ずつ検出し、土坑のうち2基は中世と、幾重にもわたる土地利用が行われたことが判明した。

### 第3節 層序

調査区内の土層堆積は、第4図のとおりである。以下、層毎に説明を行う。

I層：茶褐色土層。耕作土層である。層中には指先大のスコリアやアカホヤ火山灰が多く含まれるが、宮崎平野でこれほど大粒のスコリアが降灰した事例はないため、畑地として利用された際に使用した園芸用土と考えられる。またアカホヤ火山灰も、畑土作りを目的として、外部から持ち込まれたものであろう。

II層：瓦礫層。調査区の北壁より確認された。コンクリートの欠片や瓦、ガラス等により構成される。戦後畑地として利用された際、調査区北東部に建てたといわれる物置小屋の残骸であろう。

III層：暗褐色土層。層中に近代の陶磁器片も含むため、近世以降の堆積層と思われる。調査区東側で検出された溝（SE 2）は、この層を埋上としていた。

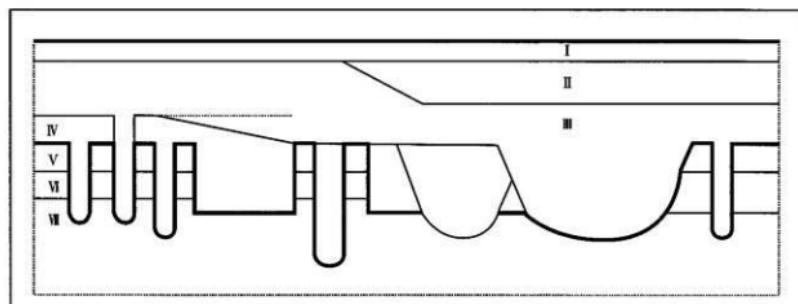
IV層：黒褐色土層。高原スコリアの二次堆積層であり、調査区西側より検出された。主に古代の遺物を包含するが、中には中世の土師器小皿も出土したことから、層の形成は古代～中世と思われる。しかし、縄文時代前期に降灰したアカホヤ火山灰層の直上に古代～中世に降灰した高原スコリアが一次堆積層を形成せずに混入したという想定はあり得ないため、本来順次堆積した層が中世の段階で、何らかの作用・行為により搅乱された結果と考えられる。また層中にはアカホヤ火山灰の粒子も認められたことから、その搅乱はV層上面にまで及んでいた可能性が高い。

V層：黄褐色火山灰層。アカホヤ火山灰である。上位はIII・IV層によって削平され、二次アカと俗称される風化層はほぼ消失していた。本遺跡における遺構検出面である。

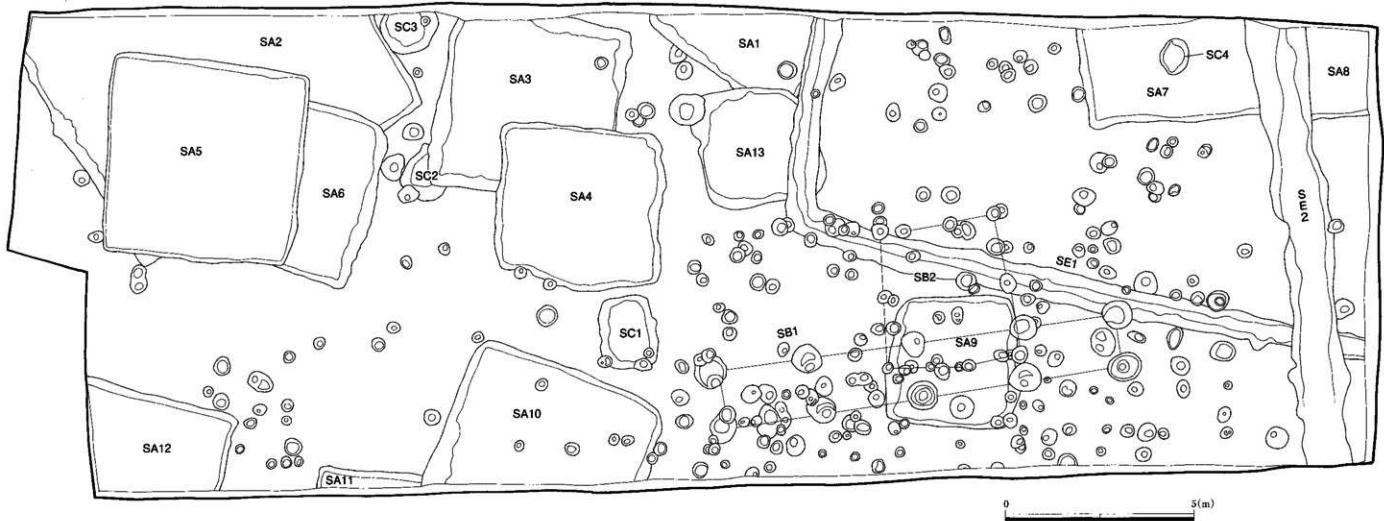
VI層：黒褐色土層。縄文早期後葉～末葉に形成された牛のスネローム層である。

VII層：暗茶褐色土層。縄文早期までの期間に形成されたローム層である。

これら基本土層と、遺構の層位的関係は次頁のとおりである。



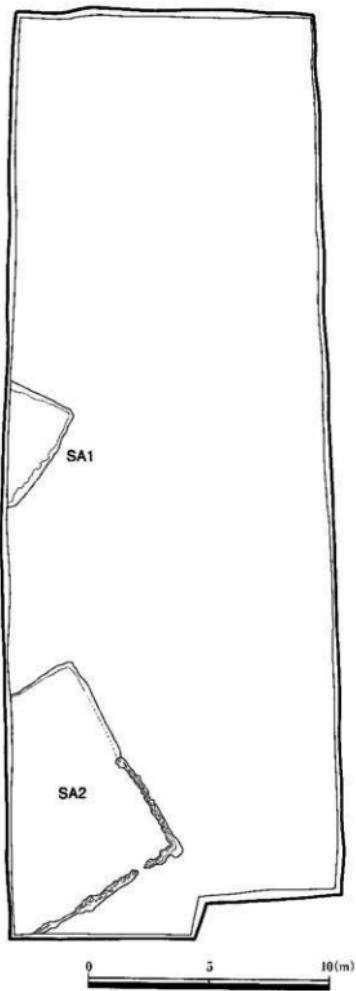
第4図 土層柱状模式図



第5図 遺構分布図 ( $S = 1/100$ )

## 第4節 検出遺構及び出土遺物

調査の結果、古墳時代、古代、中世、近世の遺物・遺構を確認した。以下、時代別に説明したい。



第6図 古墳時代遺構分布図

### 1. 古墳時代の成果

遺構は、竪穴建物が2軒が検出された。検出面はアカホヤ火山灰層（V層）上面である。遺構内からは多量の遺物が出土した。

#### ① 竪穴建物

##### SA1

調査区中央部北壁より検出された。北側は調査区境界に接するばかりでなく、南端はSA13に、東端はSE1に切られているため、調査部分は遺構の1/3程度に留まる。調査部分から推定すると、平面形は隅丸方形で、南壁を主軸とすると、主軸方向はS-23°-E、南壁の長さは3.6m、遺構検出面であるアカホヤ火山灰上面からの深さは約38cmである。埋土は黒色土の単色を基調としており、貼床等は畳層が相当するが、明確には確認できなかった。

遺構埋土からは膨大な量の遺物が出土した。1、2は小型壺である。同一器種ながら、1は頸部が比較的長く、器面は工具ナデが用いられ、頸部が短く、棒状の工具により丁寧に磨かれる2とは異なる。3はミニチュア土器である。器壁が不安定なのは手捏ねによるものと思われる。また最大径に当たる位置に、内面にまで達する細い穴が認められるが、これは製作時、胎土に植物が混入したためであろう。しかしこの混入が意図したものであるかは不明である。4、5は高壺の脚柱部である。外面には縦位の工具による磨きが残されるほか、立ち上がりに僅かな膨らみを認めることができる。

6、7は中型壺である。6は二重口縁を呈する短頸壺であり、頸部屈曲部には巻貝の圧痕を斜位に巡らす。外面は斜位の刷毛目が明瞭に認められ

る。7は外面の調整は認められない。肩の張りは弱いが、全体的な器形は6と同様と推測される。8、9は大型壺である。9は二重口縁を呈する短頸壺であり、より大型で器壁が厚い。内外面共に斜位の工具による刷毛目が認められ、底面には鋭利な工具による×字状の鎌印が認められる。8の器形はより歪であり、斜位の刷毛目や短冊状の工具による調整を中心としながら、内面には横位の工具ナデが認められる。11縁部の形態は不明である。

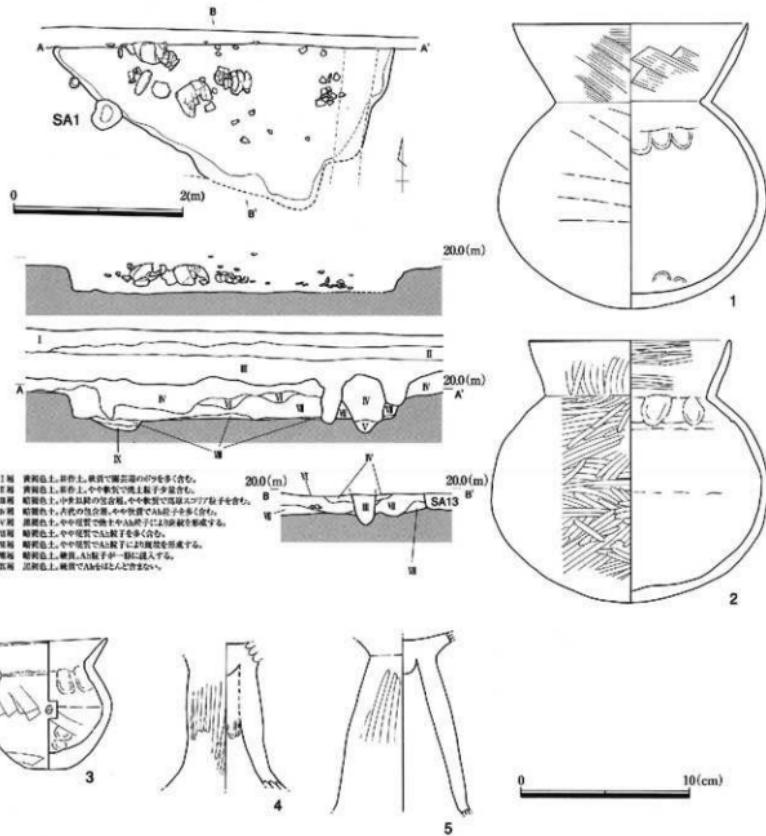
出土遺物は、遺構埋土より極めて良好な状態で出土した。そのため、遺構廃絶に伴い一括廃棄されたと考えられる。ただし、埋土は黒色土を基調としており、アカホヤ火山灰のような下層の混入は認められないことから、埋没に当たっては遺構周辺の表土が自然作用により流入したと推測される。

#### SA2

調査区北西部より検出された。北側は調査区境界に接するばかりでなく、南側はSA-5、6により切られていた。遺構の床面はSA11・12よりわずかに深かったため、柱穴が確認できただけでなく、遺構の南壁の西半分と西壁において壁帶溝を伴うことが確認された。しかしそのような後世の遺構により、アカホヤからの立ち上がりは殆ど確認できず、遺物も底面や残存埋土からの検出に留まった。残存部から推定すると、平面形は方形、南壁の長さは7.35mと大型であり、遺構検出面からの深さは約45cm、南壁を主軸とした場合、主軸方向はS-34°Wとなる。壁帶溝は南壁の西半分と西壁より確認された。南壁では幅15cm程度の溝状を呈するが、西壁は深さ5cm未満の、浅い不定形のビットが連続するような状態であった。なお、南壁の中央付近には浅い土坑も認められた。検出位置からSA2と関連すると考えられるものの、目的は不明である。

10～23は遺構内出土遺物である。10～17は高坏である。内10～15は脚柱部である。10は結合部が括れており、円形の透かしが3ヶ所に設けられる。脚柱部の膨らみは僅かである。11は結合部の括れが大きいものの、底部に向かうにつれ僅かな膨らみを呈しながら大きく広がる。12は脚柱部の膨らみが大きく、底部との境界はなだらかである。13～15は脚柱部に縦位の磨きが認められる一群である。後二者は、脚柱部の膨らみが殆ど認められない。16は坏部であり、屈曲が明瞭である。

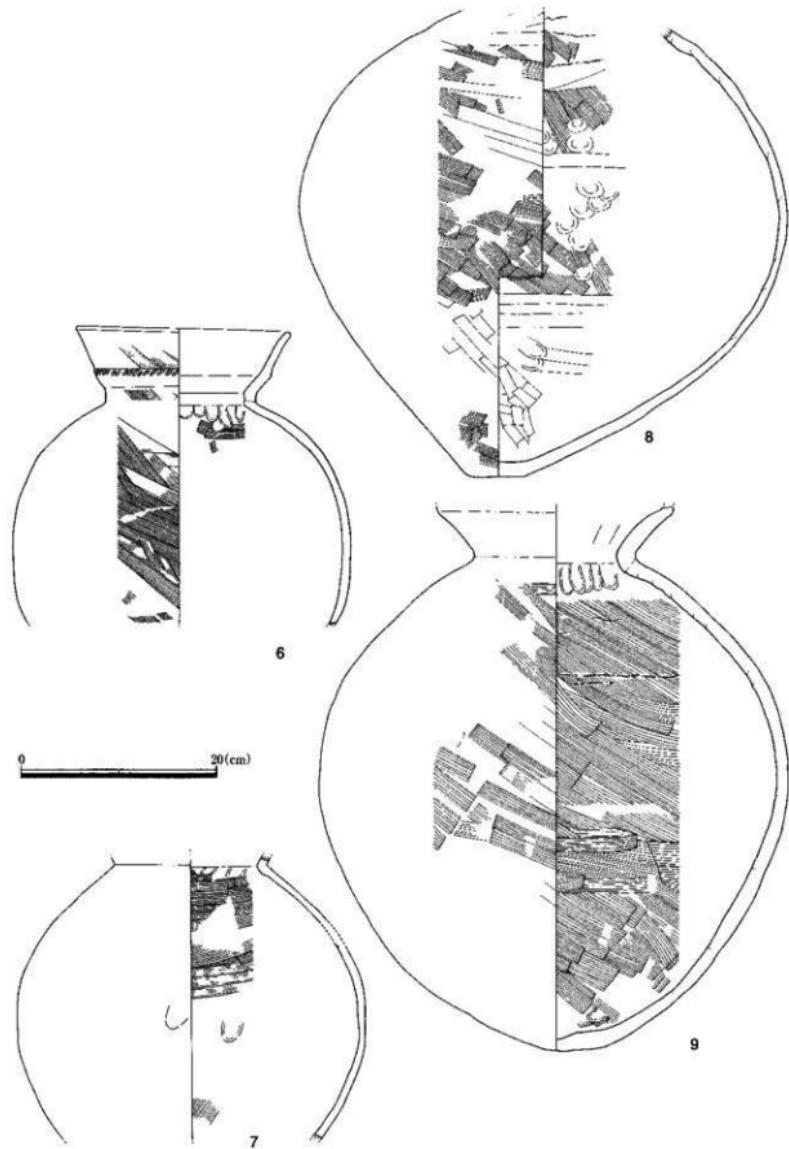
18は小型の坏である。器高は低く、頸部から口縁部まで大きな変化なく直線的に広がる。内面はヘラ状工具で削っており、底面も工具で削りながら上げ底を作出する。19は二重口縁を呈する短頸壺の口縁～頸部である。20は外面に鋭利な工具で鋸歯状文が描かれ、下位に3本単位の横線文や斜位の垂下沈線が描かれる。器種は不明だが下位にいくにつれ大きく広がることから、壺と推測される。21は壺である。口縁部、胴部共に僅かな膨らみが認められ、口縁部と胴部の境界付近には断面三角形の粘土紐が貼り付けられた後、細長い工具により斜位の刻みが行われる。22～24は壺の底部である。遺構からは3点もの底部が出土したが、これは本来一個体ごと埋没したもののは後の遺構により破壊され、底部のみが残存したと思われる。なお、22には工具による直線の鎌印が認められる。



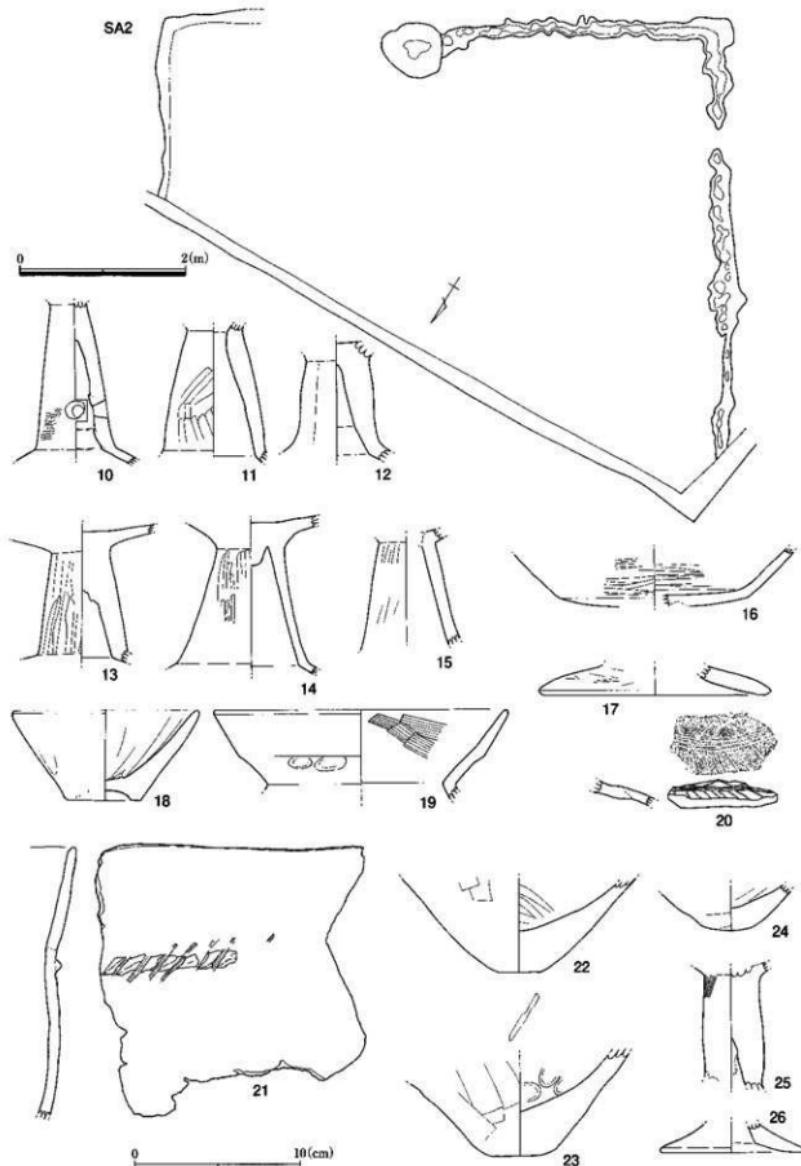
第7図 SA1及びSA1内出土遺物実測図

## ②包含層中の遺物

古墳時代の遺物はIV層(搅乱層)からも出土した。多くは図化不可能なほどの小片であるが、ここでは図化できた2点を掲載する。25、26は高坏の脚柱部と底部である。25は結合部から底部に至るまで径の広がりは殆ど認められないが、脚柱部の膨らみを明瞭に認めることが出来る。



第8図 SA1内出土遺物実測図 (S=1/5)



第9図 SA2及びSA2内出土遺物、古墳時代出土遺物実測図

## 2. 古代の成果

古代の遺構は、竪穴建物11軒、溝状遺構1条、掘立柱建物2棟である。検出面は全てアカホヤ火山灰層（V層）上面である。

### ①竪穴建物

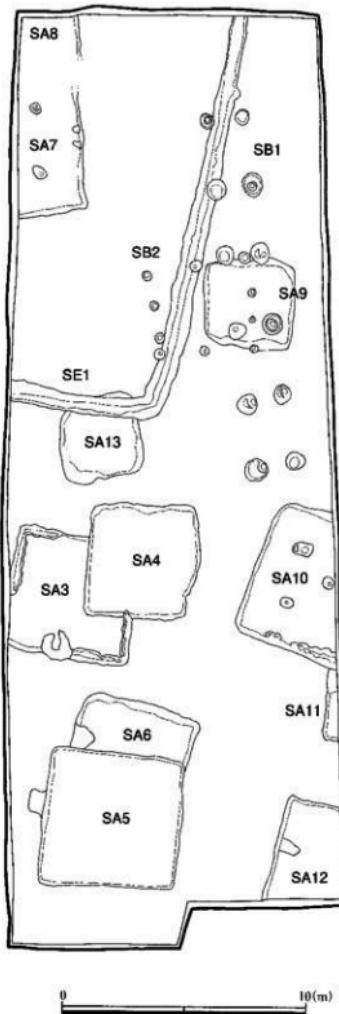
#### SA3

調査区中央部北側より検出された。北西隅は調査区境界に僅かに接するほか、南東部はSA4を大きく切っている。平面形は方形であり、推定を含めて、西壁は4.3m、北壁は3.6mである。またカマドの主軸を遺構主軸とすると、主軸方位はN-14°Eとなる。

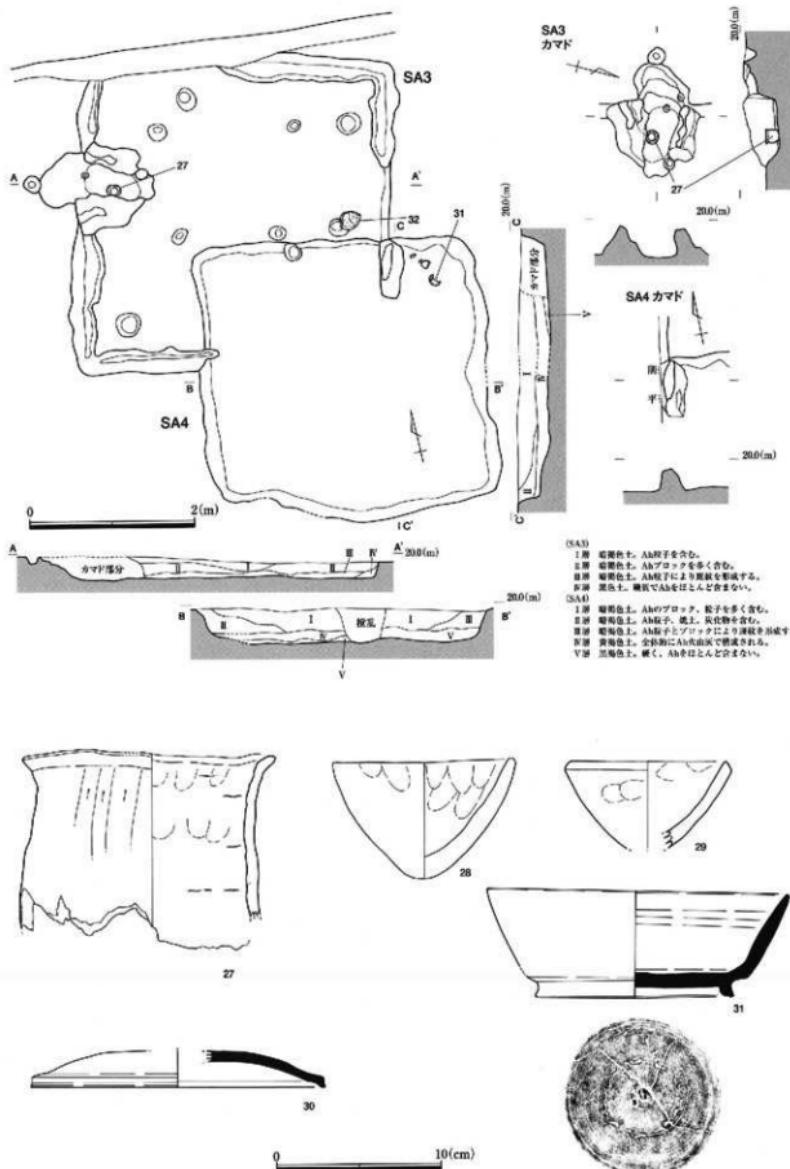
カマドは遺構西壁のほぼ中央に構築される。裾の先端から遺構壁面が50cm、裾の最大幅は56cmである。壁面には、長さ30cmに及ぶ階段状の落ち込みが認められた。構築にあたっては、貼床面をU字状に掘り窪め、裾部の下位を貼床上とし、その上に黄褐色の粘質土を乗せたと予測される。焚き口から燃焼部にかけての壁面は熱による赤変や硬化が認められたが、焚き口と煙道を隔てる天井部は既に崩落しており、支脚やその抜き取り穴も認められなかった。ただ、燃焼部床面には、使用により表面が顕著に劣化した甕が出土した。

遺構はアカホヤ火山灰と黒色土の混合による貼床を伴っており、柱穴は北東隅と南西隅に認められたものの、それに対応する北西隅と南東隅の柱穴は確認できなかった。北東隅と南西隅に、長さ1~2m、幅10~15cm、深さ5~10cmの壁帶溝を伴う。西壁ではカマドの下位にまで伸びており、カマドの構築に先立って壁帶溝を設けたと考えられる。

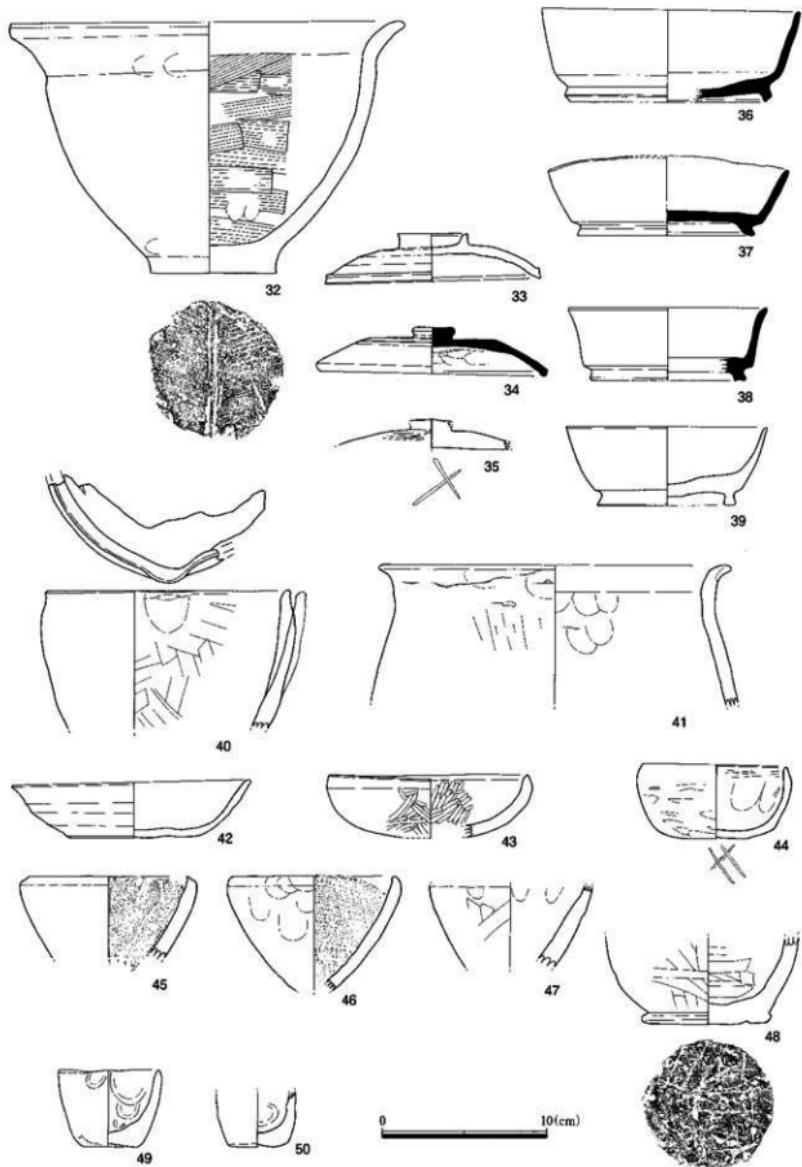
27~30、32~47は遺構内出土遺物である。27はカマドより出土したもので、著しく比熱していることから、破損後にカマドに常時据え置かれたと思われる。28、29、45~47は布痕土器であり、28・29はカマド付近で出土した。カマド付近



第10図 古代遺構分布図



第11図 SA3、4及びSA3、4内出土遺物実測図



第12図 SA3、4内出土遺物実測図

のものは、使用のためか布の痕跡が摩滅している。45～47は比較的布の痕跡が明瞭であったが、いずれも底部を欠損していた。32は丈の低い壺であり、SA4との境界付近より出土した。外面は縦位の工具により粗いケズリが行われるが、内面は横位の刷毛目が行われる。また底部にはシダ植物と思われる葉の圧痕が認められる。30、33～35は蓋である。33はつまみが高台状を呈しており、口縁部の外面には明瞭な段が設けられる。34は天井部と口縁部の間に稜が設けられ、口縁端部は丸くカーブを描きながらやや下に伸びており、かえりが退化したものと考えられる。35は内外面が工具により精緻に研磨されており、天井部内面には「×」状の鎌印が認められる。40は土師器壺である。工具ナデを施した器面は口縁部で内済し、一端は指で押したよう肩衝状の外反が見られる。36～39、42～44は壺である。36～39は高台を有し、42～44は高台を持たない一群である。36～38は須恵器である。37は焼成時と思われる器形の歪みが激しい。42～44は高台を持たない一群である。42は通常の壺の形状であるが口縁部が大きく垂む。43、44は口縁部が内傾する。43は外面に工具による磨きが密に行われる。44は、通常の壺より径が小さく器高が高い。底面には「キ」状の鎌印が行われる。

#### SA4

調査区中央部より検出された。遺構はSA3に大きく切られており、床面がSA3よりわずかに深いために、平面形が一辺3.6mの、正方形に近い隅丸方形を呈することは確認できるものの、北壁東寄りに存在したカマドは、後に構築されたSA3により裾部と焚き口を破壊され、辛うじて片裾を残すのみであった。

遺構北壁を主軸とすると、主軸方位はN-5° Eとなる。遺構は黒色土を主体とする貼床を伴っていたが、柱穴は確認できなかった。

31、48～50は遺構内出土遺物である。31は須恵器壺であり、高台を有する。底部の高台内側に、竹管状の刺突が円形に巡る。48は壺と考えられる。焼成は粗悪であり、底面には広葉樹の圧痕が認められる。49、50は手捏ねのミニチュア土器である。底部から垂直に近い角度で立ち上がり、そのまま口縁に至る。器形はコップ形を呈する。

#### SA 5

調査区北西部で検出された。遺構東側はSA2、遺構北側はSA11を大きく切っている。平面形は一辺4mの正方形であり、北壁を主軸とするとN-12° Eとなる。遺構は黒色土を主体とする貼床を伴う。壁帶溝等の付帯構造物や柱穴は検出できなかった。

カマドは遺構北壁のほぼ中央に構築される。壁面を外側に突出させるように1m近く掘り込んだ後、白色の粘土を塗りつけてカマドを成形すると共に、裾部を設けている。粘土の塗り込みは最深部でオーバーハングしており、調査の際に一部陥没したが、陥没部分が若干軟質であったため、煙道であった可能性も考えられる。

51～66は遺構内出土遺物である。51はカマドから出土した。胴部下半の欠損部は摩滅しており、欠損後もカマドに設置された状態で使用されたと考えられる。52～59、61は壺である。52～54は高台を有するが、須恵器は52のみである。56～58は交差する鎌印も認められる。52は高台と口縁部の境界が明瞭だが、53,54は比較的なだらかである。また、54の外面には稜が

幾重にも残される。高台を持たないもののうち57は大型でボウル状の器形を呈しており、粗く接合したため、輪積み時の縫ぎ目が明瞭に残される。58は工具による磨きを多用し、外間に突帯状の稜線が残される。59の胴部には、内外面共に屈曲が認められ、口縁が外反する。61はボウル状を呈する。内外面共に研磨が顕著に行われる。62～64は蓋である。いずれも天井部を消失しており、つまみの形状は定かでない。62は天井部が明瞭である一方、口縁部のかえりは弱い。63・64は中央に向かって傾斜し、口縁端部は外側に大きく張り出しながらかえりを設ける。64の口縁部は大きく歪む。65は短頸の壺であり、頸部で明瞭にくびれる以外に口辺縁で一度膨らみ、口縁部で大きく外反する。66は胴部が膨らむ壺であり、内外面には指頭の押圧が残される。

#### SA 6

調査区北西部で検出された。遺構西側はSA5によって大きく切られており、南北の長さが7.2mの方形を呈し、北壁を主軸方向とするとN-16°Eとなることは分かるものの、東西方向の長さは不明である。床面近くには、黒色土を主体とする貼床が行われる。なお、柱穴は検出されなかった。カマドは遺構北壁のほぼ中央に構築される。壁面は燃焼部の奥でやや抉れており、白色の粘土によって据部を設ける。67は遺構内出土遺物である。壺の胴部以下である。カマド付近において、倒立した状態で出土した。

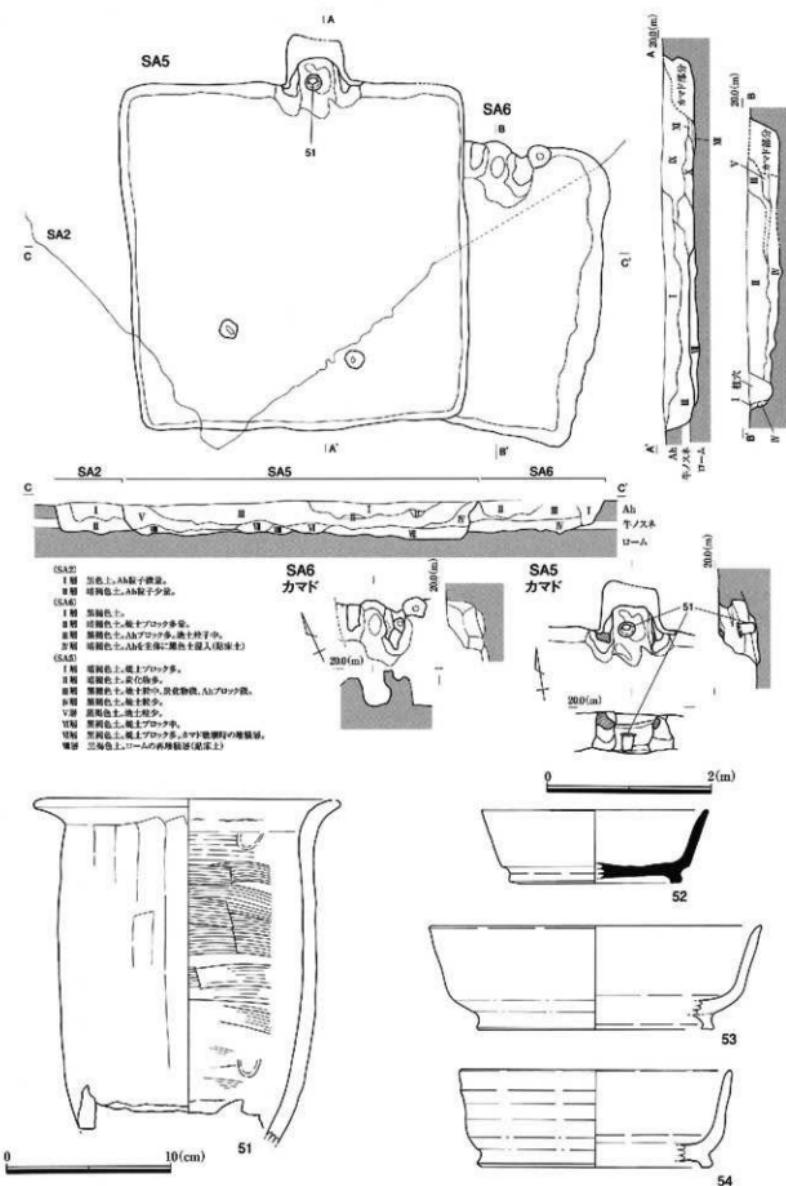
#### SA 7

調査区北東部より検出された。遺構北側の大半は調査区境界に接するほか、東部はSE2によって切られており、調査部分は南西部のみであった。よって方形を呈するものの、遺構の規模は不明である。ただ、南壁で検出されたカマドが壁面中央に位置していたと考えると、南壁は3.5m前後であったと考えられる。残存部のうち遺構南壁を主軸とすると、主軸方位はS-8°Wとなる。遺構は黒色土を主体とする貼床を伴っていた。また、柱穴は2基認められた。柱穴位置が平面形に対応していたとすれば、東西の長さは4.8mである。遺構からは中世の土師器小皿が出土したことから、当初中世の遺構と考えていたが、遺構の土層断面から、中世期に床面に達するほどの搅乱を受けていることが判明した。

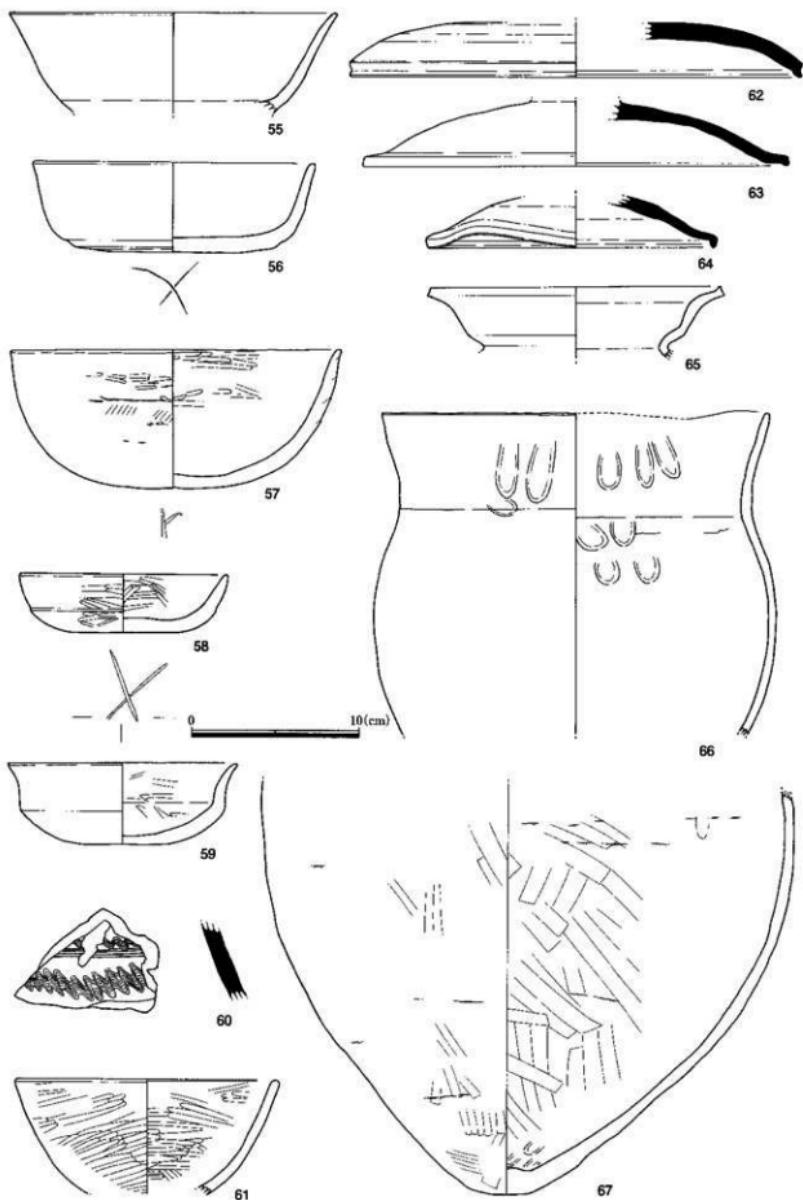
カマドは遺構南壁に構築される。柱穴の位置から、南壁のほぼ中央に位置していたと予想される。カマドの裾部は26cmと著しく短く、幅は50cm、裾部の両脇には小さな段が設けられ、それも含めれば63cmである。また、構成土は黒色土を主体としており、黄褐色粘質土を主体とする他のカマドとは異なっていた。焚き口や燃焼部は熱による赤変が若干認められた。カマドに接する壁面は、長さ5cm、幅40cm、深さ5cm程度の、溝状の段が設けられており、この段から小型の土器が2個体出土した。遺構内出土遺物は68～70である。中世における搅乱のため、出土遺物はごく僅かであった。

#### SA 8

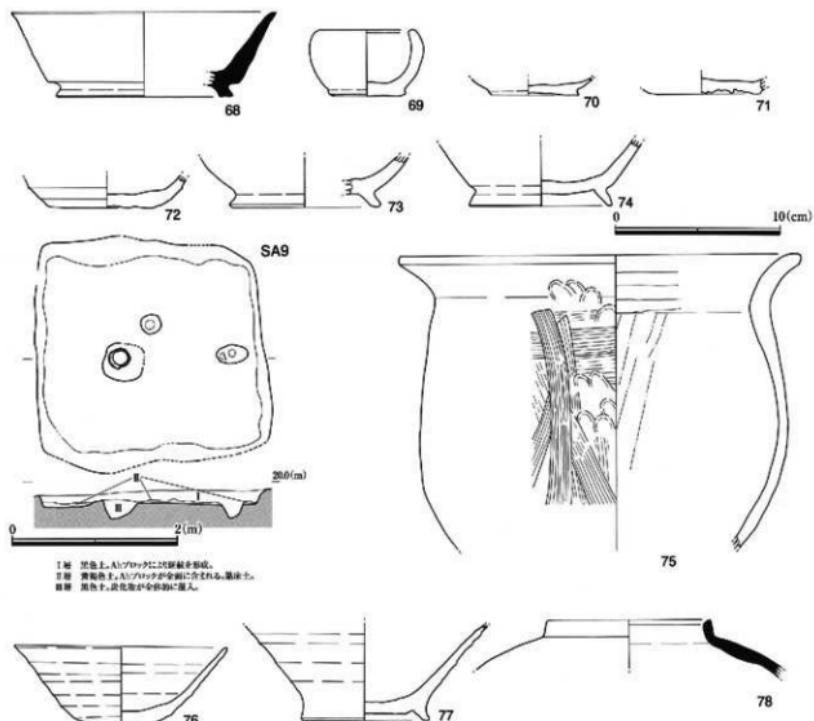
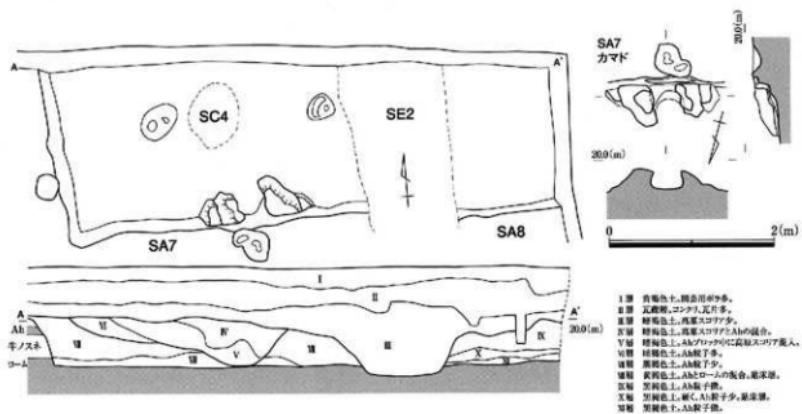
調査区北西隅より検出された。遺構東部・北部は調査区境界に接するほか、遺構西部はSE2によって切られており、調査部分は南部の一角のみであった。よって方形であったと考えられるものの、遺構の規模は全く不明である。深さは約60cmである。また残存部から推察され



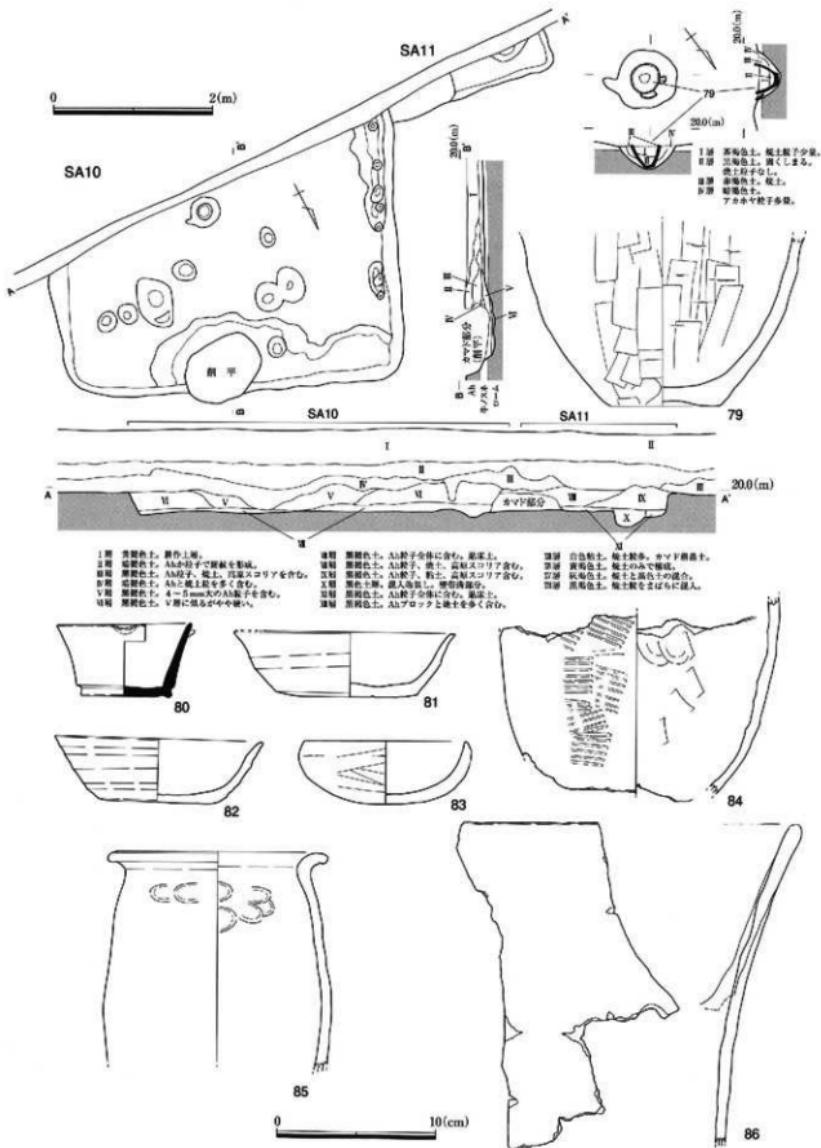
第13図 SA5、6及びSA5、6内出土遺物実測図



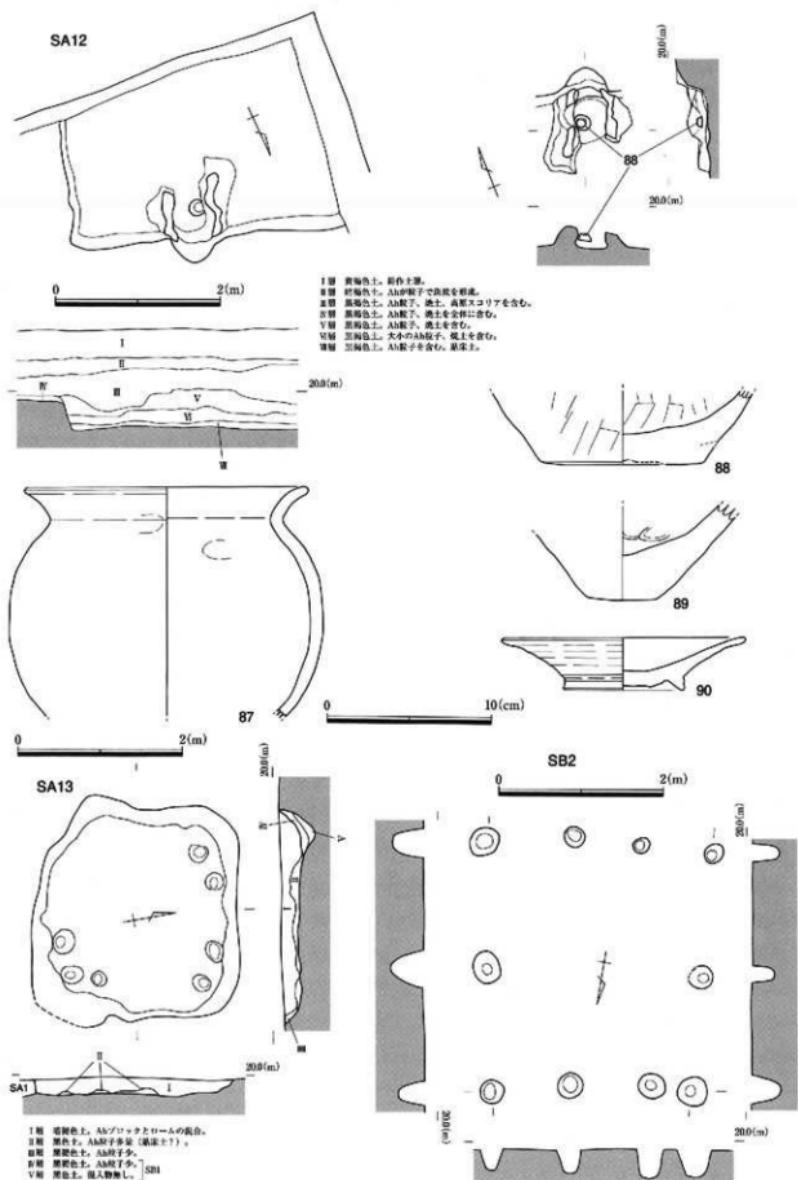
第14図 SA5、6内出土遺物実測図



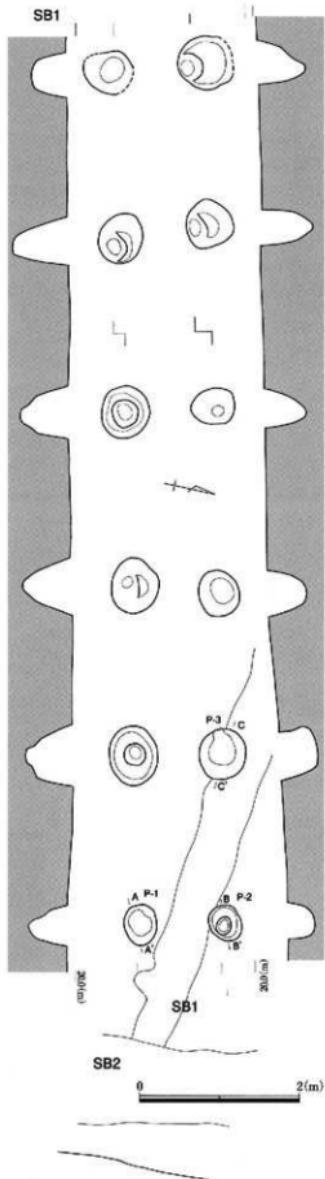
第15図 SA7~9及びSA7~9内出土遺物実測図



第16図 SA10、11及びSA10内出土遺物実測図



第17図 SA12、13、SB2及びSA12、13内出土遺物実測図



る主軸方位はS-8°Wであったと考えられ、隣接するSA7と全く同じである。SA7とは壁面の延長がずれていることや埋土の違いから別の造構と判断したが、位置や方向から、時期的に接近したと考えられる。なお、黒色土を主体とした貼床が認められたが、柱穴やカマドといった屋内構造を示す施設は確認できなかった。

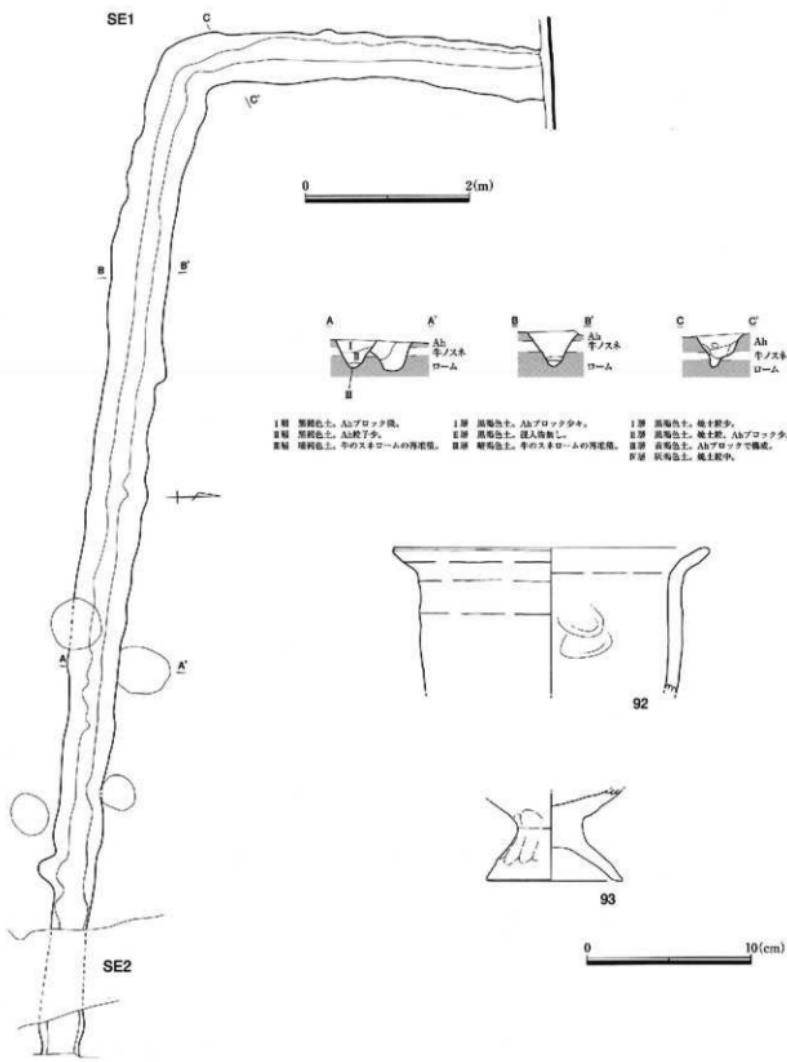
71～74は遺構内出土土器である。いずれも土師器坏であり、底部からの立ち上がりは膨らみが設けられる。73、74には高台が貼り付けられる。

SA 9

調査区の南東寄りで検出された。遺構周辺は、SB1、2をはじめとしたビット群が分布しており、遺構内も無数のビットが分布していた。また、調査時の土層観察より、SB1より新しく、SB2よりは古い。遺構は深さ15cm以下と浅く、遺構床面もIV層中位であり、V層下面～VI層を埋土とする他の竪穴建物とは異なっていた。平面形は一辺2.8mの隅丸を呈する正方形である。また、東壁はほぼ磁北、南壁はほぼ南北に位置する。カマドの痕跡は認められないが、遺構の中央付近から埋甕炉を検出した。また、アカホヤと黒色土によって構成される貼床も認められた。柱穴は2基検出されたものの、配置に規則性は認められなかった。

75～78は遺構内出土土器である。75は埋甕炉内の出土土器である。土師器甕であり、底部を欠損す

第18図 SB1及びSB1内出土遺物実測図



る。外面頸部付近は被熱のためか白く色が抜けている。76、77は外面に稜が認められる。77の底部は高台が貼り付けられた後に高台内側を蛇の目状の沈線が巡り、高台を強調させている。78は短頸壺である。

#### SA10

調査区中央南側で検出された。遺構南側は調査区境界に接するほか、遺構南西部はSA11を大きく切っている。そのため、平面形が方形を呈することや検出面から貼床上面までの深さは約30cm、北壁が長さ4mである以外は不明な点が多い。また、北壁を主軸とすると、主軸方位はN-20°Eである。

遺構は北壁ほぼ中央には白色の粘土の集積が認められ、恐らくカマドと考えられる。加えて南壁付近から埋壺も検出された。埋壺の位置を遺構中央とした場合、南北方向の長さは4.8mと予想される。また、遺構西壁の南側からは壁帶溝も検出された。床面からの深さは10cm未満、幅は約20cmであるが、南にいくにつれ幅広であった。また、部分的にピット状の落ち込みを伴っており、ピットは深さ15cm程度とやや深い。遺構北側には柱穴が多く検出された。遺構床面には黒色土を主体とする貼床が認められたが、この貼床は壁帶溝の中までそのまま入り込んでいた。

80～86は遺構内の出土遺物である。79は埋壺として使用された土器であり、内外面に工具による縦位のナデが顕著に施された底部である。80はコップ形須恵器である。底部に蛇の目状の溝を作出することで高台とし、明瞭な段を持ってやや外反しながら立ち上がる。口縁は一部に指で外側に押したような痕跡が見られるが、それによって外反が強くなっている。恐らく肩衝を意識したものと思われる。残存が良好なばかりでなく、全体的な調整も精緻であり、須恵器の中でも一際目立つ。81～83は土師器壺である。82は外面に稜が多く残されるが、81はさほど顕著ではない。83は底部からカーブしながら立ち上がるものであり、外面には工具ナデが行われる。84、85は甌、もしくは甌である。86は器種不明土器であり、上手すら定かでない。端部が見られるほか、外面の一部が張り出す。

#### SA11

調査区西南部で検出された。遺構は北側が僅かに調査区境界から出るのみである上、東側はSA10によって切られているために、検出面からの深さは約30cm、方形で北壁を主軸とするとN-6°Eとなるが、遺構の規模は不明である。北壁ほぼ中央に位置したと思われるカマドも、SA8によって大きく削平され、黄褐色粘土によって構築された片裾が辛うじて確認できる程度であった。しかし遺構は黒色土を主体とした貼床を伴っており、遺構西部から検出されたピットは、その貼床の上から掘り込まれていることから、遺構に伴う柱穴と考えられる。なお、このような残存状況から、出土遺物も皆無である。

#### SA12

調査区南西部で検出された。遺構は南部と西部が調査区境界に接するため、検出は遺構北東部のみであり、規模も不明である。平面形は方形を呈し、北壁を主軸とするとN-15°Eとなる。深さは約50cmであり、柱穴は検出されなかった。

北壁にはカマドを伴っていた。カマドの位置が北壁の中央付近にあったとすると、北壁の長

さは3.5m程度と推測される。

87～89は出土遺物である。88はカマド内に伏せられた状態で出土した底部片である。87もカマド付近から出土した甕である。89は底部であるが、器形から、より古い時代の土師器が流入したと考えられる。

### SA13

調査区中央より僅かに北東にて検出された。遺構は東部がSE1と重なるものの、こちらが切っている。埋土も、黒色土を基調とするその他の遺構に比べ、暗褐色土を基調とする。古墳時代の堅穴建物であるSA1を切るばかりでなく、SE2も切っており、古代の遺構でも最も新しいと考えられる。柱穴は遺構の隅に2～3基単位で固まって検出されたが、南東部のみ柱穴が欠落していた。90は出土遺物である。器形は皿状を呈しており、高台を有する。皿部と底部の境界は沈線状に強調されており、外面には稜を作う。

### ②掘立柱建物

#### SB1

調査区南東より、東西方向に6基、南北に2列並んで検出された。柱穴間は東西方向に3.1～3.2m、南北の列は約1.7mの間隔で立ち並ぶ。柱穴は径70cm程度、深さは検出面から60～80cmと、他のピット群の倍の規模である。柱穴の埋土からは、周囲とは色調がやや暗くなる格好で柱痕らしき落ち込みを検出した。柱痕は12基のうち7基は遺構底面にまで残されるが、底面に認められない5基のうち2基は断面から確認された。柱痕の径は約15cmと小ぶりである。埋土中には、遺構上位を中心としてスコリア状のテフラが堆積するが、時期は特定できなかった。遺構の切り合いから、SE1より新しいが、SA9や調査区内に多く分布するピット群よりも古い。遺構西側の延長上にはSA10が位置するが、遺構内には柱穴を思わせるような落ち込みは確認されなかった。代わりに東側は、SE2によって削平された可能性もあるが、更に東側は調査区外にあたるため不明である。91は、P-1より出土した土師器壊である。遺構中位より出土した。

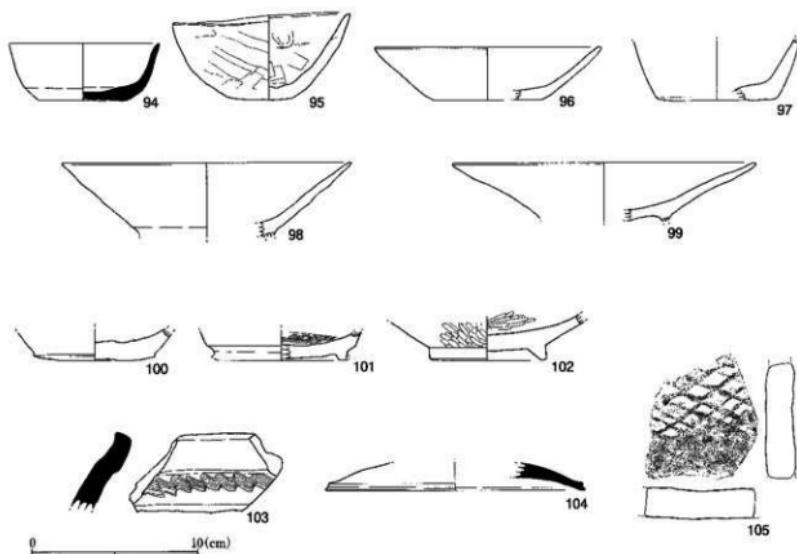
#### SB2

調査区中央よりやや東よりで検出された。東西の辺は2.7m間隔で2間並び、南辺は1.2m間隔で3間並ぶが、北辺の間隔は不規則である。柱穴は径20～30cmであり、柱穴の深さも40～50cm程度と、遺跡内で確認された、標準的なピット群と同じ規模であるが、規則的な配置が見られた。出土遺物はないが、東西の軸がSB1と同じであることから、古代の遺構と判断した。埋土には根固めを意識したのか、白色の粘質土が混入する。

### ③溝

#### SE1

調査区東部より検出された。遺構は東壁の南側より出て、西北西方向に14m程のびた後、ほぼ直角にカーブし北壁に至る。東西方向に伸びる地点においては、深さ約40cm程度で一定した深さで伸びるが、南北方向は深さ30cm以下と規模が小さくなるばかりでなく、底面は凹凸が大きく一定しない。遺構は古墳時代の堅穴建物であるSA1より新しいが、SA13をはじめ、



第20図 古代出土遺物実測図

SB1、SB2や多くのピットに切られていることから、古代の中でも比較的古い段階の構築と思われる。

このほか、調査区から検出されたピット群の多くはこの時期に構築されたと考えられる。SB02同様、ピット内に白色の粘土が混入するものについてはその可能性が高い。しかしながら、ピット群の一部からは中世以降の遺物が出土することから、ここでは可能性を述べるに留める。

#### ④包含層出土土器

94は須恵器の坏である。底部からの立ち上がりに膨らみが見られる。95は土師器の坏である。調整は粗く、斜位の工具ナデが内外面に施される。96は土師器の坏であり、底部から大きく外反しながら立ち上がる。97は口縁を欠損した坏と思われる。98、99は高台を持つ土師器の坏であり、大きく外反しながら立ち上がる。100～102は底部片であるが、101は高台を持ち、内面には刷毛目状の工具痕が見られ、102は内外面に磨きが行われる。

103は波状文の見られる須恵器である。口縁の外面は肥厚帯を持ち、内面は抉りが設けられる。104は蓋の口縁部である。105は、調査区から確認された唯一の瓦片である。土師質であり、斜格子の叩き目が認められる。

### 3. 中・近世の成果

中世の遺構としては、土坑2基のみ、近世に至っては、調査区東端にて検出された溝1条のみである。検出面は、全てアカホヤ火山灰層(V層)上面である。

#### ①土坑

2基検出された。

##### SC1

調査区中央付近、SA4とSA10の中間で検出された。1.8m×1.3mの隅丸方形を呈し、長軸はN-15°Wである。検出面からの深さは30cmであり、埋土は黒色土がアカホヤ火山灰と混合しながら流入していた。下端の中央やや北西より、底面に接するように土師器が5個体、重なって出土した。内訳は、土師器壺2点、土師器小皿3点である。その出土状況や、出土位置付近の埋土に搅乱の痕跡が認められないことから、遺構埋没時に一括して埋めたと考えられる。

##### SC4

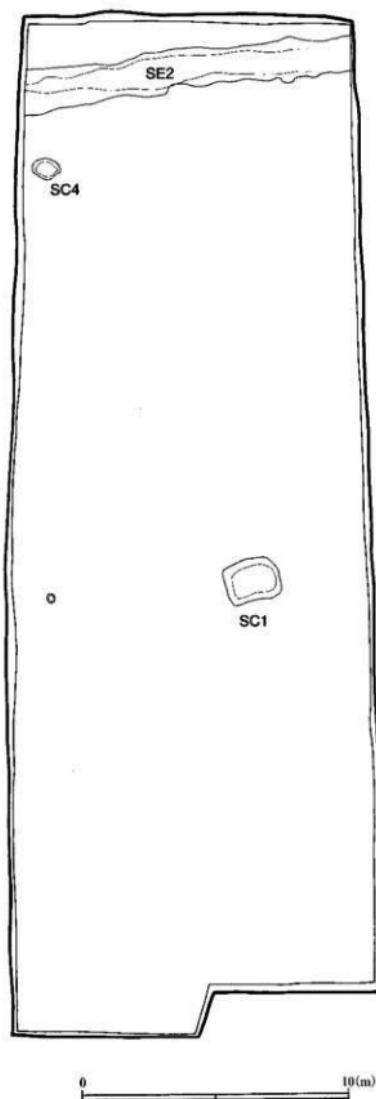
調査区の北東、SA7内より検出された。遺構は当初独立した遺構と意識されないままSA7として調査されたが、土層断面の観察の際に、別の遺構と判明した。そのため、遺構底面までの深さは検出面から50cm程度と考えられるものの、平面形は不明である。ただ上層断面から、東側が深くなり、西側はテラス状になりながら立ち上がる不定形な掘り込みであったと推定される。

出土遺物は111～116であり、いずれも土師器小皿である。

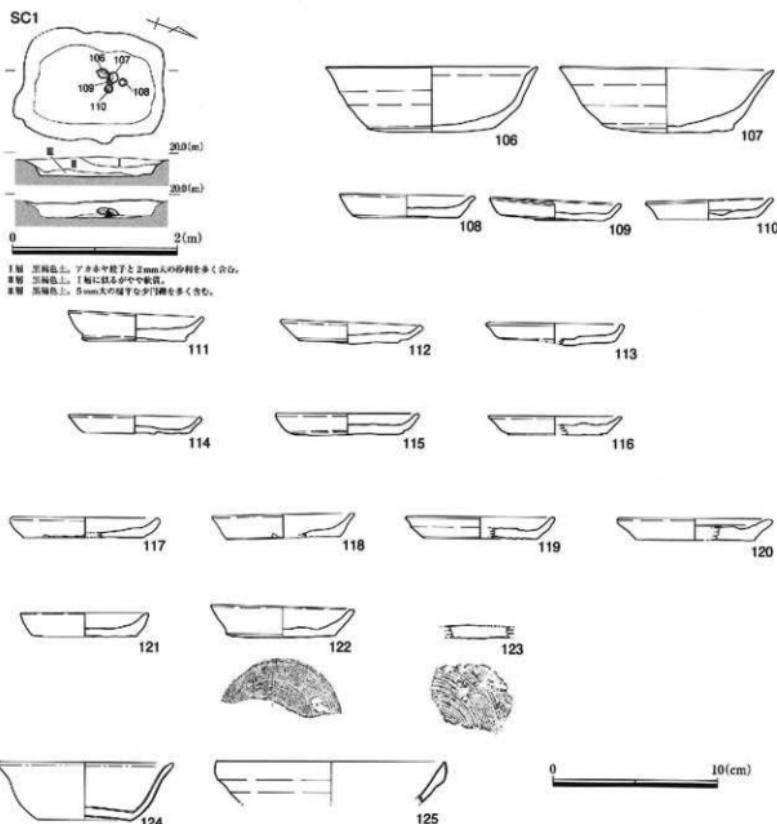
#### ②溝

##### SE2

遺構東端より検出された。近世の陶磁器片が出土することから、近世の中でも比較的新しいと考えられる。



第21図 中・近世遺構分布図



第22図 SC1及び中・近世出土遺物実測図

なお、ピット群のうち、出土土器から古代以降に相当するものが含まれる。中・近世の遺物の出土したピットは2～3基であり、それらのピットを含む掘立柱建物も検出されなかったが、遺物が確認されなかったピットの中にも、少数ながら中・近世に構築されたピットが含まれることをここで述べておきたい。

### ③包含層出土遺物

117～123は中世の遺物である。いずれも土師器小皿であるが、底面はヘラ切りが多い中、122、123は糸切りである。

124以下は近世の遺物である。124はピットから出土した陶磁器である。近世でも新しい時期の所産と考えられる。

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 古墳時代

堅穴建物から出土した土器は、SA1 から出土した大型壺、中型壺、小型壺、高环の器形や、SA2 から出土した大型壺、大型長胴壺の器形から、布留 4 式～TK73・216 型式併行期、松永・今塙屋の土師器編年では 3 期に相当する。出土した土器の製作時期は 2 軒ともほぼ同じと考えられる。しかしながら、SA2 の高环の脚柱部における縦位のミガキ等は、他の土師器より若干先行する可能性がある。この時期は、明確な年代を示す資料の不足が指摘されているだけに、今回の調査で得られた上器群は貴重であるといえる。なお、当時期は初期須恵器も出土する可能性があるが、SA1、2 の資料中には確認できなかった。

SA1、2 の存在した時期は、大淀川下流右岸の生目古墳群で墳丘規模が縮小した時期であると共に、下北方古墳群の造営開始直前に相当する。これまで不明であった古墳群造営に関連する集落が、初めて確認されたことになる。今回の調査では僅か 2 軒の検出に留まったが、古墳群に隣接するという立地から、堅穴建物がこれのみで存在したとは考えにくく、調査区周辺にも、多くの古墳時代遺構が存在したと考えるのが妥当であろう。

調査区一帯が古墳時代の集落地であったとすると、集落地の西方に下北方古墳群が分布することになるが、それは同時に生目古墳群から直視できる位置でもある。大淀川を挟んだ二つの古墳群と、それを生み出した集団を考える上で興味深い配置が想定できる。

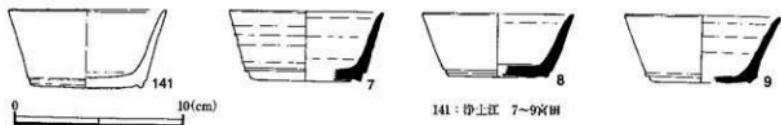
### 古代

堅穴建物が数多く検出された。SA3、SA5 は、中村氏の陶邑編年では IV 期、8 世紀前半に属する。この 2 軒によって切られた堅穴建物は、時期を明確に示す遺物は出土していないものの、やや先行する時期のものと言える。また出土土器から、その他の堅穴建物もそれに前後する時期に相当すると考えられる。外面に稜を持つ杯を出土した SA9、SA13 は 9 世紀代まで遡り込むと考えられるが、調査区から出土した内黒土器は僅かであることから、当時、居住にかかる土地利用は希薄であったと推察される。

堅穴建物から検出されたカマドは 11 軒のうち、SA3、4、5、6、7、10、11、12 の 8 軒から検出されたばかりでなく、SA8 も本末伴っていた可能性が高い。カマドは、通常設置される北壁ばかりでなく、西壁（SA1）や南壁（SA7）に設置されたが、SA7 のカマドは小型であったことから、今回調査区外だった北壁にも存在する可能性が考えられる。それは、造構の一部しか確認されなかった SA8 においても同様である。このほか、SA9、10 の堅穴建物中央からは埋葬炉も検出され、燃焼施設を持たないことが確実な堅穴建物は SA13 のみであった。

掘立柱建物のうち SB1 は大型であり、柱痕を持つことから、一般的な居住施設や倉庫とは性格が異なる。しかしながら、列の間隔が僅か 1.2m と、規模に比して狭すぎ、この 2 列の柱穴だけで何らかの機能を果たせるとも思えない。以上の点から、SB1 のうち北側の列を廂とする、大型の掘立柱建物が浮かび上がる。ただし、南側の柱穴列や東側の延長が確認できなかつたため、建物の規模は不明である。

SE1 は、標高に殆ど変化がないことや、埋土に水性作用が認められないことから、排水や配水を目的としたものではなく、区画を意図したものと考えられる。その場合、区画によって生じた区画内側と外側の違いが注視されるが、区画内側に構築された古代の遺構は SA7、8 のみであり、意図を窺い知ることはできなかった。



第23図 宮崎市内出土のコップ形須恵器

出土遺物については、まず80のコップ形須恵器が挙げられる。かつて井上尚明氏の論文に詳しく述べたとあるが、本例は高台を持ち、I.I縁部の丸いB-2類となる。容積は110mlである。コップ形須恵器は全国に分布し、官衙的性格を持つ遺跡から出土する割合が高いとされている。ところで、この器種は市内でも他に清土江遺跡、宮田遺跡の出土遺物において類例がある。いずれも形状が非常に類似しており、特に底面の調整における共通性は、規格性をもつて製作されたことを示す。このほか、下北方5号墳や1号墳の周辺で出土した古代瓦も、1点ながら確認できた。

以上、検出遺構、出土遺物から、当遺跡は官衙的性格を強く窺わせるものであり、下北方台地において官衙的施設が存在したことを見出すだけの材料を得ることができた。しかしながら、SBIにしろ規模が確定できず、台地上における空間構成に辿りつく事はできなかった。

#### 中・近世

墓壙が2基のみであり、土地利用に関する有益な遺構は得られなかった。しかし、SC1から出土した壺と小皿は、出土状況から共伴関係にあると考えられる。県下における土師器の共伴関係は、かつて平畠遺跡にて出土しているが、それを改めて示すこととなった。SA4は不定形、かつ底面も平らに整形した痕跡が認められない。小皿も土坑内に分散した状態であり、より丁寧に構築され、据え置かれるように土師器が供えられたSC1とは対照的である。

近世は大型の溝であるSE2が構築された。規模も大きく、排水もしくは区画を目的としたと考えられる。ただし同時期の遺構は確認されなかった。

#### (参考文献)

- 松永幸寿 2004「日向における古式土師器の成立と展開－宮崎平野部を中心として－」  
『西南四国・九州間の交流に関する考古学的研究』
- 今垣尾義行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」  
『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会資料
- 中村 浩 2001「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」芙蓉書房出版
- 井上尚明 1994「コップ形須恵器の考察－奈良時代の軽量機について－」『考古学雑誌』第79卷4号
- 成尾英一 1994「繩文土器の植物葉圧痕について」『南九州縄文通信』No.8
- 宮崎市教育委員会 2008「下北方1号墳周辺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第71集
- 宮崎市教育委員会 1993「清土江遺跡Ⅱ」『宮崎市文化財調査報告書』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004「宮田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第88集
- 奈良文化財研究所 2004「古代の官衙遺跡 Ⅱ 遺物・遺構編」

遺物觀察表

出土土器觀察表 (1)

遺物名 番号	遺物 種別	器種 蓋	法規(cm)		調整	色調	船上	参考	写真
			口径	高さ					
SA1 1	土師器	壺	13.8	—	16.8	外:ナデ、丁寧なナデ 内:丁寧なナデ、指頭痕 底:指頭痕	外:赤褐色、橙 内:明赤褐色、橙	微細な透明粒子:少 微細な灰褐色粒子:中	
SA1 2	土師器	壺	11.7		15.5	外:ミガキ 内:ナデ、指頭痕 底:ミガキ	外:赤褐色 内:赤褐色	1mm大の角閃石:微 微細な砂流:少	
SA1 3	須恵器 ミニチュア車		6.7	2.5	9.6	外:工具ナデ 内:丁寧ナデ、指頭痕 底:ナデ	外:明赤褐色 内:明赤褐色	1mm大の白色粒子:少 微細な透明粒子:中	
SA1 4	土師器	高环				外:ミガキ 内:ケズリ、ナデ	外:浅褐色 内:浅黄褐色	微細な透明粒子:多	
SA1 5	土師器	高环				外:ナデ、ミガキ 内:ケズリ	外:褐、黄褐色 内:黄褐色、褐灰色	微細な透明粒子:少 微細な赤色粒子:中 微細な白色粒子:微	
SA1 6	土師器	壺	17.1			外:丁寧なナデ、刷毛目 内:丁寧なナデ、刷毛目、 指頭痕	外:にぶい橙、橙 内:刷毛目、黄褐色	微細な透明粒子:少 微細な白色粒子:少	
SA1 7	土師器	壺				外:ナデ、指頭痕 内:刷毛目、指頭痕	外:褐、赤褐色 内:橙、明黄褐色	黄褐色~2mm大の白色粒子:少 2mm大の赤褐色粒子:少 砂粒:多	
SA1 8	土師器	壺		4.6		外:刷毛目、ナデ、工具ナ デ 内:指頭痕、工具ナデ、 刷毛目	外:棕、深褐色 内:にぶい白、黑褐色	1mm大の赤褐色粒子:多 砂粒:多 微細な透明粒子:中	
SA1 9	土師器	甕	底不可			外:刷毛目、ナデ 内:指頭痕、工具ナデ、 刷毛目	外:橙 内:褐	微細な白色粒子:微	
SA2 10	土師器	高环				外:ナデ、ミガキ 内:しづらし、ナデ	外:にぶい橙、灰褐色 内:にぶい白	微細な黑色粒子:微 微細な白色粒子:微	
SA2 11	土師器	高环				外:ミガキ、ナデ 内:—	外:褐 内:—	微細な白色粒子:多 2mm大の透明粒子:微	
SA2 12	土師器	高环				外:ケズリ、ナデ 内:ケズリ	内:橙 外:橙	微細な白色粒子:少 砂粒:少 微細な赤色粒子:微	
SA2 13	土師器	高环				外:ミガキ、ナデ 内:ナデ	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	微細~2mm大の白色粒子:微 微細な灰褐色粒子:微	
SA2 14	土師器	高环				外:横ナデ、ミガキ 内:風化により不明	外:褐、にぶい黄褐色 内:褐	1mm大の灰褐色粒子:微 微細な白色粒子:微	
SA2 15	土師器	高环				外:ミガキ 内:ナデ	外:褐 内:橙	1mm大の白色粒子:微 1mm大の灰褐色粒子:微	
SA2 16	土師器	高环				外:ミガキ 内:ミガキ	外:橙 内:褐	微細な透明粒子:微 砂粒:微	
SA2 17	土師器	高环	(13.2)			外:ミガキ 内: 底:ナデ	外:黄褐色、橙 内:黄褐色	砂粒:微 微細な透明粒子:多 角閃石:微	
SA2 18	土師器	环	10.9	4.3	5.5	外:ナデ、工具ナデ、指 頭痕 内:工具ナデ 底:工具による上げ底	外:橙 内:橙	1mm大の透明粒子:微 1mm大の白色粒子:少 2mm大の灰褐色粒子:微	
SA2 19	土師器	壺	17.4			外:指頭痕、ナデ 内:刷毛目	外:橙 内:橙	微細な砂粒:多	
SA2 20	土師器	小口				外:ナデ、縫刻 内:風化により不明	外:黄褐色 内:黄褐色	1mm大の白色粒子:少 1mm大の灰褐色粒子:少 1mm大の透明粒子:微	
SA2 21	土師器	壺				外:突起貼付、刻目 内:ナデ	外:橙 内:橙	3mm大の灰褐色粒子:多 3mm大の赤褐色粒子:少 2mm大の白色粒子:微	
SA2 22	土師器	壺		2.3		外:ナデ 内:工具ナデ、指頭痕 底:ナデ、縫刻	外:明赤褐色、灰褐色、黄褐色 内:明赤褐色、褐灰色	微細な透明粒子:少 微細な白色粒子:少 砂粒:少	

遺物觀察表

出土土器觀察表 (2)

遺構名	遺物 番号	種別	法量(cm)			調査	色調	状土	備考	写真
			器種	口径	脚高					
SA2	23	上傳器 壺			2.9	外：工具ナデ、ケズリ 内：ナデ、指頭痕 底：ナデ	外：にぶい橙 内：にぶい橙、黒褐	1mm人の黒色粒子：少 1mm大の赤褐色粒子：少 微細な透明粒子：微		
SA2	24	土師器 壺			—	外：ナデ 内：工具ナデ、指頭痕 底：ナデ	外：橙 内：明赤褐	微細な透明粒子：微 砂粒：多 小砂利：微		
SA3	25	土師器 壺				外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい橙 内：にぶい橙	微細な赤褐色粒子：微 良石：中		
SA3	26	土師器 壺	(8.4)			外：ナデ 内：崩毛目、ナデ	外：にぶい橙 内：にぶい橙	良石：中 微細な赤褐色粒子：少		
SA3	27	土師器 壺	14.8			外：ナデ、工具ナデ 内：ナデ、指頭痕	外：暗赤褐、灰黄褐 内：明黄褐、灰黄褐	小砂利：中 1mm人の白色粒子：少	カマド内出土上器	
SA3	28	土師器 布面土器	11.0		7.3	外：指頭痕 内：指頭痕	外：浅黃橙 内：浅黃橙	微細な白色粒子：微		
SA3	29	土師器 布面土器	9.3			外：ナデ、指頭痕 内：布口痕、指頭痕	外：橙 内：橙	微細な赤褐色粒子：少		
SA3	30	須恵器 壺	(17.8)			外：回転ナデ 内：回転ナデ、指頭痕	外：褐灰 内：褐灰	1mm人の黑色粒子：微		
SA3	31	須恵器 壺	17.9	11.6	6.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ、指頭痕 底：ヘラ切り、高台附付	外：灰白、灰褐 内：灰白、灰褐			
SA3	32	土師器 壺	23.6	7.6	15.2	外：ナデ、ケズリ、指頭痕 内：ナデ、崩毛目、指頭痕 底：木の葉底	外：橙、灰褐 内：赤褐、橙、黒褐	砂粒：多 微細な赤褐色粒子：少 微細な透明粒子：少		
SA3	33	土師器 壺	12.6	5.3	3.0	外：ケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	外：橙 内：浅橙、赤褐	2mm人の赤褐色粒子：少		
SA3	34	須恵器 壺	13.5		3.0	外：回転ナデ、ケズリ 内：ナデ、崩の目	外：灰 内：灰	微細な白色粒子：多		
SA3	35	土師器 壺				外：回転ナデ、ミガキ 内：回転ナデ、ミガキ、裏 印	外：橙、赤褐 内：橙、赤褐	1mm大の赤褐色粒子：少		
SA3	36	須恵器 壺	15.4	11.7	5.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り、高台附付	外：褐、浅黄褐 内：褐、浅黄褐	微細な黑色粒子：少 微細な半透明粒子：微		
SA3	37	土師器 壺	14.5	10.6	4.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り、高台附付	外：灰、灰オーリーズ 内：にぶい黄褐 底：灰オーリーズ	1mm以下の白色粒子：微 微細な黑色粒子：微	一部に自然剥付着	
SA3	38	須恵器 壺	(11.8)	(9.2)		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り、高台附付	外：灰 内：灰	1mm大の黑色粒子：微		
SA3	39	土師器 壺	11.8	8.1	4.7	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り、ナデ	外：浅黃橙、黄 内：明黃褐	微細な赤褐色粒子：少		
SA3	40	土師器 壺	(14.2)			外：風化により不明 内：工具ナデ、指頭痕	外：にぶい黄褐、赤 内：にぶい黄褐	小砂利：多		
SA3	41	土師器 壺	(20.7)			外：指頭痕、ケズリ 内：ナデ、指頭痕	外：橙 内：橙	砂粒：少 小砂利：中		
SA3	42	土師器 壺	14.2	8.0	3.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい橙、灰白 内：にぶい橙、灰白			
SA3	43	土師器 壺	11.9		(3.8)	外：ミガキ 内：ミガキ	外：にぶい橙 内：にぶい橙	微細な赤褐色粒子：微 1mm大の半透明粒子：少 1mm大のバニス度：多		
SA3	44	土師器 壺	8.5	4.0	4.5	外：ミガキ 内：ミガキ、ナデ 底：ミガキ、裏印	外：赤、明赤褐 内：明赤褐	4mm以下の茶褐色粒子：少 2mm人の白色粒子：少 砂粒：多		

遺物觀察表

出土土器觀察表 (3)

遺構名	遺物 番号	種別 器種	法量 (cm)			測定	色調	胎土	備考	写真
			口径	高さ	底径					
SA3	45	土師器 布底土器	(9.4)			外: 裂化により不明 内: 布底、指痕痕	外: 明赤褐、赤橙 内: 赤粒	微細な透明粒子: 多 微細な白色粒子: 少 砂粒: 少		
SA3	46	I. 鋼器 布底土器	(9.7)			外: ナデ、福頭痕 内: 布底痕、指痕痕	外: 棕 内: 棕	微細な白色粒子: 微	一部オリーブ灰の 付着物有	
SA3	47	土師器 布底土器	(8.8)			外: 木口ナデ、指痕痕 内: 布底痕	外: 棕、褐灰 内: 棕、褐灰	砂粒: 中 小砂利: 無		
SA4	48	土師器 壺		7.7		外: 工具ナデ 内: 木口ナデ 底: 木口底痕	外: 黄褐、褐灰 内: 黄褐、褐灰	3mm大の白色粒子: 多 1mm大の白色粒子: 微		
SA4	49	I. 鋼器 ミニチュア土壺	5.9	3.6	4.5	外: ナデ、指押え 内: ナデ、指押え 底: ナデ	外: 棕、黒、暗赤褐 内: 緑、にぶい棕、 黒褐	砂粒: 多 石英: 多		
SA4	50	土師器 ミニチュア土壺		2.9		外: ナデ 内: ナデ 底: ナデ	外: 明赤褐(黒変有) 内: 灰白	砂粒: 多 石英: 少		
SA5	51	土師器 壺		17.7		外: ナデ、ケズリ 内: ナデ、刷毛目	外: 明褐、明黄褐 黒褐	小砂利: 中 微細な赤色粒子: 中 微細な半透明粒子: 微 黒褐	カマド内出土土器	
SA5	52	風呂器 壺	(13.4)	(10.3)		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ヘラ切り	外: 灰、オリーブ黒 内: 灰	1mm大の黑色粒子: 微		
SA5	53	土師器 壺	(19.8)	(14.0)	6.3	外: 回転ナデ、回転ケズリ 内: 回転ナデ 底: 回転ナデ、高台貼付	外: 棕、黄褐 内: 棕	3mm大の白色粒子: 微 微細な黑色粒子: 中 微細な赤褐色粒子: 中		
SA5	54	土師器 壺	(16.2)	(13.4)	5.9	外: 回転ナデ、回転ケズリ 内: 回転ナデ 底: ヘラ切り	外: 棕、赤褐 内: 棕	5mm大の赤褐色粒子: 少 3mm以下の中褐色粒子: 中		
SA5	55	土師器 壺	(19.2)			外: ナデ 内: ナデ	外: 棕 内: 棕	砂粒: 多 微細な赤褐色粒子: 中		
SA5	56	I. 鋼器 壺	16.4	11.6	5.4	外: 裂化により不明 内: 裂化により不明 底: ヘラ切り、窯印	外: 棕 内: 棕	6~1mm大のパミス痕: 多 砂粒: 微 2mm大の砂粒: 中		
SA5	57	土師器 壺	(19.4)	—	8.2	外: ミガキ、ナデ、工具ナデ 内: ミガキ、ナデ 底: ナデ、窯印	外: にぶい棕、棕 内: 棕	1mm大の黑色粒子: 微 微細な赤色粒子: 微		
SA5	58	土師器 壺	(12.1)	(6.0)	3.6	外: ミガキ、ナデ 内: ミガキ、ナデ 底: ナデ、窯印	外: 棕 内: 棕	1mm大の透明粒子: 微 1mm大の赤褐色粒子: 中 1mm大の白色粒子: 中		
SA5	59	I. 鋼器 壺	(13.6)	4.8	(4.6)	外: ナデ、ミガキ 内: ミガキ、ナデ 底: ナデ、窯印	外: 棕 内: 棕	1mm大のパミス痕: 多 1mm大の赤褐色粒子: 微		
SA5	60	風呂器 不明				外: 波状横縞文 内: 回転ナデ	外: 灰白 内: 灰白	微細な灰褐色粒子: 中		
SA5	61	土師器 壺	(15.3)			外: ミガキ 内: ミガキ	外: 棕、黑 内: 黑	微細な裏唇片: 微 微細な透明粒子: 微 砂粒: 少		
SA5	62	風呂器 壺	(25.2)			外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰 内: 灰オリーブ			
SA5	63	風呂器 壺	(26.5)			外: 回転ナデ、回転ケズリ 内: 回転ナデ、上昇ナデ	外: 灰白、灰オリーブ 内: 灰白、オリーブ黒、黑	砂粒: 微		
SA5	64	風呂器 壺	(17.4)			外: 回転ナデ、回転ケズリ 内: 回転ナデ、工具ナデ	外: 灰 内: 灰			
SA5	65	土師器 壺	(17.1)			外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 黄褐 内: 赤粒	2mm大の砂粒: 微 4mm大の赤褐色粒子: 微		
SA5	66	I. 鋼器 壺	(22.6)			外: ナデ、指のばし、指痕痕 内: ナデ、指のぬし、指痕痕	外: 棕、黑 内: 棕	微細な透明粒子: 少 砂粒: 多 小砂利: 微		

遺物観察表

出土土器観察表 (4)

遺物名 遺物 番号	種別 器種	法寸(cm)			調査	色調	胎土	備考	写真
		口径	高さ	底径					
SA6	67 土師器 壺		1.4		外:工具ナデ 内:工具ナデ、指痕痕	外:赤褐色、擦 内:に赤い粒、基盤	1mm以上の白色、黒色粒子:少 感粒:多		
SA7	68 頭蓋器 环	(15.8)	(10.6)	(5.1)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:凹凸ナデ、高台付	外:黄褐色 内:黄褐色	1mm以上の黒色粒子:多	外面に自然釉付着	
SA7	69 土師器 ミニチュア器	(5.6)	(4.6)	(4.0)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:に赤い粒	1mm以下の赤褐色粒子:少 微 微細な黑色粒子:微		
SA7	70 土師器 环		5.3		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色			
SA8	71 土師器 环		6.6		外:ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:橙			
SA8	72 土師器 环		6.8		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:橙			
SA8	73 土師器 环		(8.8)		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:高台付	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	微細な赤褐色粒子:少		
SA8	74 土師器 环				外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り、凹凸ナデ、高台付	外:橙、浅黄褐色 内:橙、浅黄褐色			
SA9	75 土師器 壺		23.9		外:衝突、指痕痕、ナデ 内:ケズリ(ト→上)	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色、陶灰	砂粒:少 微細な透明粒子:微	埋蔵伊内十器	
SA9	76 土師器 环	12.7	4.5	4.7	外:回転横ナデ 内:回転横ナデ 底:ヘラ切り	外:赤褐色、灰褐色 内:浅黄褐色			
SA9	77 土師器 环		7.5		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り、高台	外:橙 内:橙	微細な透明粒子:中 1mm以上の赤褐色粒子:微		
SA9	78 頭蓋器 壺		(9.7)		外:回転ケズリ 内:回転ナデ	外:灰褐色、黄褐色 内:灰褐色、黄褐色	微細な黑色粒子:中 微細な白色粒子:微		
SA10	79 土師器 壺		6.7		外:工具ナデ、ケズリ 内:工具ナデ 底:木葉压痕	外:橙、灰褐色 内:に赤い粒、陶灰	1~5mmの赤褐色粒子:多 小砂利:中	埋蔵伊内上器	
SA10	80 頭蓋器 コップ形	8.2	5.5	4.7	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:蛇の目高台	外:黄褐色、灰褐色 内:陶灰	微細な黑色粒子:微		
SA10	81 土師器 环	(13.5)	(5.9)	4.1	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙、浅黄褐色 内:橙	微細な透明粒子:微 砂粒:微		
SA10	82 土師器 环	12.8	6.5	4.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙、に赤い粒 内:橙	微細な赤褐色粒子:少 5mm以上の赤褐色粒子:微		
SA10	83 土師器 环	10.1	3.9	3.9	外:ナデ 内:回転ナデ 底:ナデ	外:浅黄褐色、橙 内:浅黄褐色、橙	砂粒:少 微細な透明粒子:微		
SA10	84 土師器 壺?		6.7		外:タタキ、ケズリ 内:微押す、ナデ	外:に赤い粒、陶灰、黑 内:に赤い粒、黑褐色	5mm前後の赤褐色粒子:多 1mm以上の白色粒子:微	外面に焼付着	
SA10	85 土師器 壺	(13.0)			外:ナデ、指痕痕 内:ナデ、指痕痕	外:に赤い粒、陶灰 内:に赤い粒、陶灰	5mm以上の茶褐色粒子:中 3mm以上の白色粒子:微	外面に焼付着	
SA10	86 土師器 露頭不明				外:T突ナデ、ナデ、指痕痕 内:刷毛目、ナデ、指痕痕	外:に赤い粒、に赤い粒 内:に赤い粒、に赤い粒	3~5mmの赤褐色粒子:少 微細な透明粒子:微		
SA12	87 土師器 壺	(16.8)			外:ナデ、指痕痕 内:ナデ	外:橙、に赤い粒 内:橙	微細な赤褐色粒子:微		

遺物観察表

出土土器観察表 (5)

遺構名	遺物 番号	種別 性様	法量(cm)			調査	色調	胎土	備考	写真
			口径	底高	底深					
SA12	88	上部器 底、素		(9.8)		外:工具ナデ 内:工具ナデ、指顎痕 底:ナデ	外:橙 内:棕	1mm人の白色粒子:微 砂粒:多 小砂利:微	カマド内出土土器	
SA12	89	土師器 壺		4.2		外:横ナデ、ナデ 内:横ナデ、指顎痕 底:ナデ	外:明黄褐 内:明黄褐、棕	1mm大の透明粒子:微 1mm人の黒色粒子:中 1mm人の灰褐色粒子:中		
SA13	90	土師器 壺	(14.3)	7.0	3.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:褐、赤褐 内:棕、赤褐			
SB-I P-1	91	土師器 壺	(11.3)	(7.0)	(3.9)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:浅黄褐 内:浅黄褐、灰黄褐	1mm大の赤褐色粒子:少		
SE-I	92	上部器 壺		(18.4)		外:回転ナデ 内:ナデ	外:にぶい棕 内:赤褐、にぶい褐	1~3mm人の赤褐色粒子:兼 雜細な黒色粒子:少		
SE-I	93	上部器 壺台		8.2		外:ナデ、指顎痕、ケズリ 内:ナデ 底:工具痕(ナデ?)	外:明褐、棕 内:棕	微細な赤褐色粒子		
包含層	94	須恵器 壺		8.9	5.1	3.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:灰 内:灰赤、褐灰	1mm人の白色粒子:微	
包含層	95	土師器 壺		10.2	--	外:工具ナデ、指顎痕 内:工具ナデ、指顎痕 底:ナデ	外:褐灰、にぶい黄褐 内:褐灰、にぶい黄褐	石英:多		
包含層	96	上部器 壺		(13.2)	(6.5)		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ナデ	外:棕 内:棕	微細な赤褐色粒子:少 長石:微	
包含層	97	土師器 壺			(7.4)		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:黄褐 内:黄褐	微細な透明粒子:微	
包含層	98	土師器 壺			(17.2)		外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:浅黄褐 内:浅黄褐、淡褐	長石:微 砂粒:少	
包含層	99	土師器 壺			(17.8)	(8.0)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り、高台附着	外:浅黄褐 内:浅黄褐、にぶい棕	1mm大の赤褐色粒子:微 微細な黒色粒子:中	
包含層	100	土師器 壺				(7.2)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:棕、浅黄褐 内:棕	1mm大の赤褐色粒子:少	
包含層	101	須恵器 壺					外:回転ナデ 内:回転ナデ、T字ナデ 底:ヘラ切り、高台附着	外:灰白、灰 内:灰、オリーブ	微細な黒色粒子:微	
包含層	102	土師器 壺?			7.0		外:回転ナデ、ミガキ 内:ミガキ 底:回転ナデ、高台附着	外:にぶい棕 内:棕	1mm大の赤褐色粒子:中 長石:微	
SE2	103	須恵器 器形不明					外:彫刻波状紋、回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰 内:灰白	微細な白色粒子:微 砂粒:少	
包含層	104	須恵器 蓋			(15.4)		外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	外:灰オーリーブ、灰白 内:灰オーリーブ、灰白	2mm大的黒色粒子:少 微細な灰褐色粒子:少	
包含層	105	上部器 瓦					外:緑目タタキ 内:風化により不明	外:淡黄褐 内:棕	砂粒:多	
SC1	106	上部器 壺		12.5	7.7	4.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ、指顎痕 底:ヘラ切り	外:黄褐、褐灰 内:黄褐、褐灰	1mm以下の赤褐色粒子:微 1mm大的白色粒子:微	
SC1	107	土師器 壺		12.7	7.9	4.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:にぶい棕、明褐色 内:にぶい灰、明褐色	微細な白色粒子:少 微細な黒色粒子:少 微細な赤褐色粒子:微	
SC1	108	上部器 小皿		8.1	6.4	1.5	外:回転ナデ 内:回転ナデ、指顎痕 底:ヘラ切り	外:淡褐 内:淡褐	砂粒:微 微細な赤褐色粒子:微	

遺物觀察表

出土土器觀察表 (6)

遺構名	遺物番号	種別	法面(cm)			調査	色調	胎土	備考	写真
			口径	脚高	底深					
SC1	109	土師器 小皿	7.1	6.2	1.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：灰褐、褐灰 内：灰褐、棕	微細な赤褐色粒子：少		
SC1	110	土師器 小皿	7.5	6.0	1.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ、指腹痕 底：へラ切り	外：浅黄橙 内：浅黄褐、黄橙	微細な赤褐色粒子：中		
SC4	111	土師器 小皿	8.1	6.3	1.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄褐 内：浅黄褐			
SC4	112	土師器 小皿	8.6	6.0	1.1	外：回転ナデ 内：回転ナデ、指腹痕 底：へラ切り	外：にぶい橙 内：にぶい橙	微細な赤褐色粒子：少		
SC4	113	土師器 小皿	8.2	7.0	1.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄橙 内：浅黄褐			
SC4	114	土師器 小皿	7.8	6.3	1.1	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄褐 内：にぶい橙			
SC4	115	土師器 小皿	8.4	6.9	1.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ 底：へラ切り	外：にぶい黄褐 内：にぶい黄橙	微細な赤褐色粒子：微		
SC4	116	土師器 小皿	(8.0)	(5.8)	(1.2)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄橙 内：浅黄褐	Imm以下の赤褐色粒子： 少		
包含層	117	土師器 小皿	18.1	7.3	1.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：棕 内：棕	砂粒：少 微細な白色粒子：微		
包含層	118	土師器 小皿	(8.5)	(6.8)	1.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：棕 内：棕	微細な白色粒子：微		
包含層	119	土師器 小皿	(8.0)	(6.6)	(1.8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄橙 内：浅黄褐			
包含層	120	土師器 小皿	(9.0)	(7.2)	1.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：棕 内：棕	灰石：微 微細な赤褐色粒子：微		
包含層	121	土師器 环?	(7.6)	(6.4)	1.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：浅黄橙 内：浅黄褐	微細な赤褐色粒子：少		
包含層	122	土師器 小皿	8.6	6.7	2.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：へラ切り	外：にぶい棕 内：にぶい棕、灰白	微細な赤褐色粒子：微		
包含層	123	土師器 环または皿				内：回転ナデ 底：へラ切り	内：棕	Imm人の赤褐色粒子：少 微細な赤褐色粒子：少		
SP170	124	器蓋 环?	(10.3)	5.6	3.4	外：回転ナデ、施釉 内：回転ナデ、施釉 底：へラ切り、ナデ、施釉	外：灰白 内：灰白			
SP168	125	器蓋 环?			(13.6)	外：回転ナデ、施釉 内：回転ナデ、施釉	外：白 内：白			



図版1 下郷第4遺跡周辺空中写真



図版2 下北方遺跡群空中写真



図版3 下郷第4遺跡遺構分布空中写真



図版4 調査区内の土層堆積状況



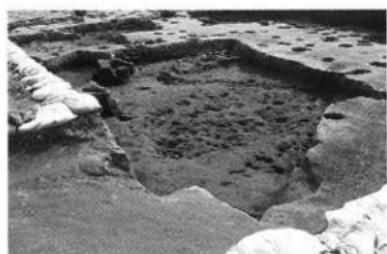
図版5 SA1遺物出土状況



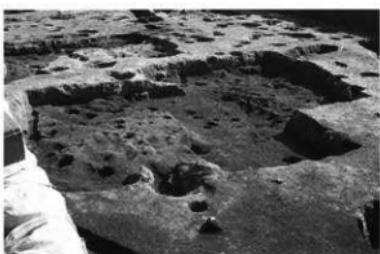
図版6 SA1遺物出土状況



図版7 SA1完掘状況



図版8 SA2完掘状況



図版9 SA3、4完掘状況



図版10 SA3カマド検出状況



図版11 SA5完掘状況



図版12 SA5カマド検出状況



図版13 SA5カマド検出状況



図版14 SA7、8、SC4検出状況



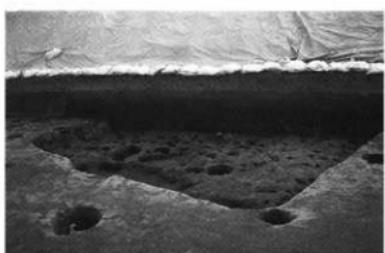
図版15 SA7カマド検出状況



図版16 SA9完掘状況



図版17 SA9埋甕炉検出状況



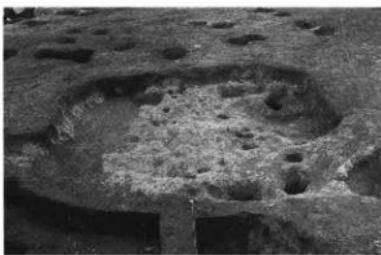
図版18 SA10完掘状況



図版19 SA12完掘状況



図版20 SA12カマド検出状況



図版21 SA13完掘状況



図版22 SB2検出状況



図版23 SB1検出状況



図版24 SB1柱穴配置状況



図版25 SE1検出状況



図版26 SC1検出状況



図版27調査に参加された作業員の皆さん



图版28 SA1 出土土器



图版29 SA3 出土土器



図版30 SA5 出土土器



図版31 SA10 出土土器



図版32 SA9 出土土器



図版33 SC1 出土土器



图版34 SC4 出土土器



图版35 SA10出土土器 (第16图80)



図版36 SA1出土土器（第7図1）



図版37 SA1出土土器（第7図2）



図版38 SA1出土土器（第7図3）



図版39 SA1出土土器（第8図6）



図版40 SA1出土土器（第8図8）



図版41 SA1出土土器（第8図9）



図版42 SA2出土土器（第9図10）



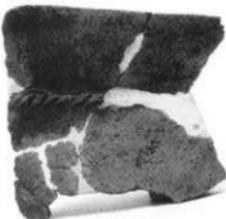
図版43 SA2出土土器（第9図13）



図版44 SA2出土土器（第9図14）



図版45 SA2出土土器（第9図18）



図版46 SA2出土土器（第9図21）



図版47 SA3出土土器（第11図27）



図版48 SA3出土土器（第12図32）



図版49 SA3出土土器（第11図31）



図版50 SA3出土土器 (第12図33)



図版51 SA3出土土器 (第12図34)



図版52 SA3出土土器 (第12図37)



図版53 SA3出土土器 (第12図36)



図版54 SA3出土土器 (第12図42)



図版55 SA3出土土器 (第12図43)



図版56 SA5出土土器 (第13図51)



図版57 SA5出土土器 (第14図66)



図版58 SA5出土土器 (第13図52)



図版59 SA5出土土器 (第14図57)



図版60 SA9出土土器（第15図75）



図版61 SA10出土土器（第16図84）



図版62 SA10出土土器（第16図85）



図版63 SA10出土土器（第16図86）



図版64 SA12出土土器（第17図87）



図版65 包含層出土土器（第20図95）



図版66 SC1出土土器（第22図106）



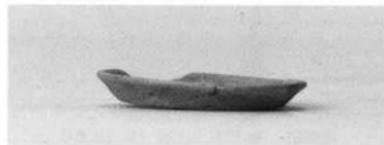
図版67 SC1出土土器（第22図107）



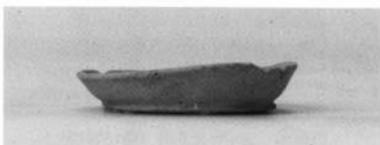
図版68 SC1出土土器 (第22図108)



図版69 SC1出土土器 (第22図109)



図版70 SC1出土土器 (第22図110)



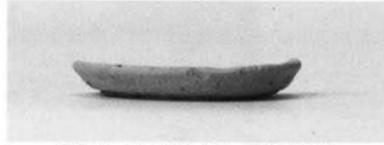
図版71 SC4出土土器 (第22図111)



図版72 SC4出土土器 (第22図113)



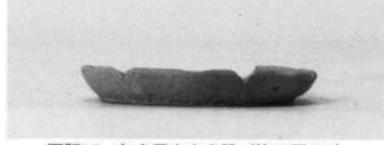
図版73 SC4出土土器 (第22図114)



図版74 SC4出土土器 (第22図115)



図版75 SC4出土土器 (第22図116)



図版76 包含層出土土器 (第22図117)



図版77 包含層出土土器 (第22図118)



図版78 包含層出土土器 (第22図119)



図版79 包含層出土土器 (第22図120)



図版80 包含層出土土器 (第22図121)



図版81 包含層出土土器 (第22図122)

# 報告書抄録

ふりがな	しもきたかたしもごう						
書名	下北方下郷第4遺跡						
副書名	集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第74集						
編集者名	金丸武司						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橋通1丁目14番20号						
発行年月日	2009年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積
下郷第4遺跡	みやざきけいじん 宮崎県 みやざきけいじん 宮崎市 しもきたかたしもこう 下北方町 しもこうちょう 下郷	45201	20-079	31° 56' 35" 付近	131° 24' 52" 付近	20061204 ～ 20070209	394m <sup>2</sup>
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集合住宅建設	散布地	古墳時代 古代 中世 近世	竪穴建物 掘立柱建物 溝 土坑 ピット	土師器 須恵器 古代瓦 陶磁器			

宮崎市文化財調査報告書 第74集

## 下北方下郷第4遺跡

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

発行 宮崎市教育委員会